
君はNPC？

理祭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君はNPC？

【Nコード】

N8653X

【作者名】

理祭

【あらすじ】

剣と魔法、冒険者とモンスターの世界。小さな村に住む少年カリユはある日、森の中で小さなドラゴンと出会う。怪我をしたドラゴンを村はずれの元冒険者の家へつれていき、物語が始まった。

はじまりの日 1

うつそうと生い茂った森の、少しひらけた場所には隙間から陽の光が差し込み、柔らかな雰囲気をかもしだしている。

かたわらには小川が流れ、何匹かの魚が泳いでいた。川べりにはちょうど腰を下ろすのに適した岩も散らばっていて、疲れた旅人が息をつこうとしたときにいかにもよさそうな風情だった。

森を突っ切って村と街をつなぐ街道には、自然とそうした憩いの場所が生まれるものだ。

そこに集まるのはなにも旅人だけではない。水を飲みを訪れた小型の草食動物、それを狙って現れる肉食性の動物。森の生態系の縮図そのままに様々なものが入れかわり立ちかわり姿を見せる。

そして、人もまたその食物連鎖に連なる一つでしかない。

今、水辺には一匹の存在があった。

背は低い。ずんぐりとした体躯に土気色の肌をしている。二足歩行だが背中を丸めた前傾姿勢で、凶悪な顔つきには理性の色が薄い。それはゴブリンと呼ばれている、この世界でよく見られる生物だ。その存在についてはよく知られている一方、詳しい生態には謎の部分が多い。理由ははっきりしていて、それらと出会ったもののうと調査をしていられないからだ。それらは人類とはっきりと敵対する関係にある。

人類が火をおこし、文字を得たそのころからすでにそれらについての記述が残っている。それらは人に仇なす数多くの存在、そのなかでもっともポピュラーな存在とされていた。歴史上、人類がまだ種としてひ弱だったころには、それらに追われ、狩られていた時代

もあるという。

文明が発達した今でもそれらが危険な存在であることに変わりはない。一時の休息を得ていた旅人がゴブリンに襲われ、被害にあうような事件は決して珍しくなかった。

ゴブリンは獲物を探す視線で周囲を見渡している。手に子どもの足ほどもある太さの棍棒を持って、もう一方には無骨な盾を携えていた。身体には革をなめした胸当てを身につけている。それらが人類と同じく社会的な生き物であり、独自の文化を持っていることは広く知られていた。

鼻を利かすようにうごめかすその姿を木蔭から見つめている二対の瞳がある。真剣なものと、それを隣で呆れるように眺めている眼差しは、どちらもまだ幼さが残っていた。

「ねえ。カリユ、ほんとにやる気？」

呆れたような視線の主が、呆れたような声で言った。

「やる」

それに短く応えた声には強い決意がこもっている。

声の主は少年だった。カリユという。年のころは十才ほどで、実際にはまさしくついこのあいだ十才の誕生日を迎えたばかりだ。年相応に小柄な体つきをしている。ゴブリンとどっこいどっこいといったところだった。もちろん体格では比べ物にならない。倍まではないが、ゴブリンと少年の腕のたくましさにはそれに近い差があった。

「こっそり見つからないように帰ればいいのに……」

不満そうに言うのは、栗毛の髪をサイドで結んだ少女。同じ年ごろに見えるが、上背は隣の少年よりもある。このころの男女なら生まれが同じでも女の子のほうが成長がはやいのが一般的だが、彼女はそれに加えて少年より一つ年上だった。

二人は村で隣同士の家に住んでいる。両親たちは互いに仲がよく、日々を仕事に追われる手間を少しでも軽くするために、二人は姉弟のように一緒に育てられていた。

「なんだよ、ジニイ。あんなやつがうるついてさ、村まで来たら危ないじゃんか」

「迷いゴブリンでしょ。来たりなんかしないわよ」

ジーニアスというのが本来の名前の、その愛称で呼ばれた少女は半眼で答えた。

生まれたその日から一緒にいるこの男の子に、彼女は自然と姉としての気分を抱いている。向こうみずで考えなしのカリユをいさめるのは、いつでもどこでも彼女の役目だった。

「そんなのわかんないだろ」

口を尖らせる弟分に彼女は言った。

「村まで来るなんていうのだって、わからないでしょ」

それに、と続ける。

「もし村に近づいてきたりしたら、その時はお父さんたちがどうにかしてくれるもの」

「どうにかつてなにさ」

「追い払ってくれるってこと」

はぐれモンスターの扱いくらいであれば、村の大人なら誰でもわきまえている。そうでなければ村を成り立たせることなどできなかった。

「父ちゃんたちが村にいなかったらどうすんだよ。あいつがいつ村に来るなんてわかんないのに。ここで見失ったら、あいつ、応援を呼んでたくさんでやってくるかもしれないぞ」

ジニイは大きく息を吐いた。

昔はあんなに素直だったのに、日に日に口ばかり達者になるんだから。チビな背丈を少しでも伸ばしてこちらをにらみあげるカリユをにらみかえすが、強情な彼女の弟は退こうとしない。もう一度

ため息をついて、ジニイは遠ざかろうとするゴブリンの後ろ姿に視線を移した。

このままどこかに行ってくれるのなら問題ない。今の季節は森の実りも豊富だから、モンスターが村までやってくることはほとんどありえない。

ただ、もしカリユの言うとおりだったら？　ゴブリンの向かう先は森を通る細道で、それはそのまま村まで続いている。あのゴブリンは村の様子を見に来たのかもしれない。もしかしたら、味方の襲撃に先駆けた偵察のような役目だったりするかも。

いずれにしても、村の大人に知らせる必要があった。ジニイは決断した。

「カリユ。あたしがあいつの後を追うから、あんたは森を先回りして村に　　って」

彼女の言葉をきかず、少年はすでに足を踏み出している。

「こら、カリユっ！」

大声をだしてしまいそうになり、振り返ったカリユに人差し指でしーっと合図されてしまう。

あわててゴブリンの様子をうかがい、なんとか気づかれていないことを確かめて、ジニイはカリユのあとを追った。服をひっぱって押しとどめる。

「もう、勝手に一人で行こうとしないで」

「大丈夫だよ」

なにが大丈夫だ　　言いかけて、相手の自信満々の表情を見たジニイはいつぺんに文句を言う気がそがれてしまう。ほんと、馬鹿なんだから。全然よわっちいくせに。

「……無茶しちゃダメだからね。あたしが逃げるって言ったら、絶対逃げるって」

「わかってるよ。大丈夫、俺たちならやれるって」

「はいはい。じゃあ、いつもの場所の近くまで後をつけて、仕掛けるのはそれからよ。もしこのまま村から離れるようなら、それでおしまい。いい？　ちゃんと約束して」

「わかってるつてば。いいからほら、急ごうぜ。見失っちゃう」

「ほんとにわかってるんでしょうねえ」

ひそめた声でやりとりを交わしながら、二人は追跡を開始した。

ゴブリンは森の街道を出たり入ったりを繰り返しながら、少しずつ彼らの村のある方角へと向かっていった。街側ではしっかりと整備された道も、半ばを過ぎて村に近づくほどに小道とっていいほど自然にとけこんだものになる。ゴブリンと鉢合わせる誰かがいまだにあらわれていないことは幸運といえた。

二人の追うゴブリンの動きはふらふらしていて、ジニイは相手の目的を読むことができない。やはりただのさまよい者のように見えるが、周囲を探索しつつ村に向かっていているようにも思えた。

勘ぐりすぎているかもしれないと考えたが、ゴブリンが村に近づいていることは確かだった。

ちらりと隣を見れば、自分の判断を誇るようにこちらを見る眼差し。むむつとしたが、そこでなにか言うのもなんとなく負けたような気がして、かわりにジニイは言葉を短く告げた。

「……しょうがない。やろう」

「やたっ」

ぱあつと満面の笑みを咲かしてガッツポーズ。昔からなにも変わらない、子どもっぽい反応に口元をゆるめかけたジニイは、あわてて表情をひきしめた。

相手はゴブリン。たった一匹とはいえ、子ども二人が立ち向かうには危険な相手だ。連れが考えなしですぐ特攻してしまうような性

分である分、彼女は普通以上に慎重になる必要があった。

村の近くにはモンスターの襲撃に備えて、色々と仕掛けがある。村周りの掘りや柵といった直接、相手を防ぐものに加えて、森のいたるところに張られた早期警戒のための鳴り物もそうしたものの一つだった。

なかにはもつと積極的に、相手を撃退するための仕掛けもある。彼らはいつものように、それを利用するつもりでいた。

「それじゃ、あたしが仕掛けるね」

「なんでだよ」

一気に不機嫌に転んだ声でカリユが異を唱えた。

「だって、危ないじゃない」

「だから、なんで危ないことをやるのがジニイなのさ」

「そんなの。あたしがお姉ちゃんだからに決まってるでしょ」

見上げてくる視線に向かって彼女は当然とばかりに言い切った。しまったと思った。彼女の目の前で、きっと相手の眉がつりあがった。

「そんなこと、知るもんかつ」

「ちょっと。大きな声ださないで」

「俺がやる、俺は子どもじゃないんだっ」

「わかった。わかったってば。もう、なにかあると大声だすのやめてよ、子どもみたい」

「また言った！ だから、子どもじゃないって」

「あーもう！ うるさい！」

カリユ以上の大声でジニイが言い返した。

「そんなんだから子どもだっていうんでしょ！ バカ！ バカリユ！」

「子どもじゃない！ かけっこだってもうジニイよりはいいんだからなっ」

「ふんだ、腕相撲じゃあたしより弱いくせに！」

「うるさい！ 怪力おんな！」

「なあんですってえ〜」

がさり。

森の茂みを揺らした物音に、ぴたりと言い合いがとまる。

二人はそつと自分たちの頭上を見上げた。そこにいつからか影が覆っている。影をつくりだした相手が、感情のない真つ黒い瞳で二人を見下ろしていた。

近くで見ればさらに恐ろしげなその顔つき。水気を失ってひび割れた皮膚の細部まで見ることのできる近さにあって、三者のあいだに不自然な沈黙が生まれた。

かちや、となにかが擦れる硬い音を耳にした瞬間、カリユはジニイの身体を突き飛ばしていた。

「逃げろ！」

吐いた息を反動にして、自分も後ろに飛ぶ。二人のあいだを轟音を立ててなにかが振り下ろされた。

重さのある砂を噛む音。鈍色の凶器が短い草の生えた地面を叩いた。

持っていた棍棒で二人を打ちつけようとしたゴブリンが、奇襲に失敗して不服げに歯をむいた。口元からしたたったよだれが糸をひいて落ちた。

しずくが地面に落ちるその様子までしっかりと目にとらえて観察していたカリユは、その奥の光景に顔をゆがめた。彼に突き飛ばされて難をのがれたジニイが、目の前の出来事に呆然としたままでいる。

逃げろって言ったのに、馬鹿ジニイ！

彼女に気づいたゴブリンが腕を振り上げようと力を込めるのを見て取って、カリユは腰に巻いた小物袋へ手をつっこんだ。

手ごろな大きさを探り、そのまま握り締めて、思い切り投げつける。

適当に掴んで放ったつぶての幾つかがゴブリンの顔面を直撃した。目のあたりをおさえ、苦悶の声をあげて暴れるモンスターの前を身を屈めて横切って、カリユはへたり込んだままのジニイを強引に引き起こした。

「立って！」

叱責に、はっとジニイの目の色に力が戻った。うなずいて立ち上がった拍子に手にしていた木のかごを取り落とす。中に入っていた木の実が盛大に地面に散らばった。

「あつ」

「そんなのいいから！ ほら早く、いくよっ」

手のひらをしっかりと握り締めて走り出した。掴んだジニイの手が震えている。あるいはそれはカリユのものかもしれないかった。

「カリユ、ごめ」

「俺がおとり！ ジニイは隠れて！」

謝罪の言葉にかぶせて一方的に告げたカリユの台詞に、幼なじみから不満の声はなかった。

背中に遠吠えじみた奇声を受けて、カリユは肩越しに後ろを振り返った。

怒り狂ったゴブリンが、頭から湯気をふきだしそんな形相で彼らを追いかけてきている。恐怖に口元をひきつらせ、それを無理やりに笑みのかたちに曲げて、カリユは大きく笑った。

「わは！ きた！」

真っ直ぐ走るのは危ない。直感的にそう判断して、即座に茂みに

突っ込んだ。顔や腕に突き刺さる小枝を払って、さらに茂みの深い方向へと飛び込む。

街道から脇へ入り、奥へ。さらに奥へと向かう。

彼にとつては慣れ親しんだ森だった。こっちに行くべきだ、あっちの方には行くべきじゃない。理屈ではなく体感として肌に感じながら、やがて大人でも十分に身を隠せるほど大きな茂みを見つけたカリユは、ジニイの身体をそこへ押し込んだ。

身を乗り出してなにか言いかける幼なじみの口を閉じて、しーっと合図する。遠くからかきわけて近づく物音に鋭い視線を向けて、ジニイをその場に隠して一人で走り出した。

走りながら、小物袋からまたつぶてを取り出して物音のしてきた方向に投げつけた。適当だったので相手に当たってくれるとは思わなかったが、悲鳴と、怒りの咆哮が森に轟いた。

「こつちだ、こつち！」

あえて大声で自分の位置を宣伝しながら駆けるカリユの言動には意図がある。

幼なじみから注意を引きつける必要があつたし、なによりおとりである彼には相手が追いかけてきてもらわなければ困るのだった。

追いかけつこに興じた時間は長くない。

このあたりの森のことなら、カリユはほとんど知り尽くしている。自分が走りやすい場所、相手が追いかけにくい道を選び、それでいて完全には撒いてしまわない距離感をたもつたまま、目的の場所へたどりついた。

一見するだけでは、そこは他と大差ない場所に見える。

伐採して生まれた小さな空間。苗床に朽ち果てた切り株に刻まれ

た印でこの場に間違いがないことを確かめ、微妙な立ち位置を調整しながら、懷に手を入れた。

取り出したのはつぶてではなく、一本の紐だった。使い込まれ、ところどころから繊維のはみだしたそれは、カリユの母親が手ずから編みこんでくれたものだ。

紐の長さはカリユの腕ほどもある。真ん中のやや広くふくらんだ部分に、カリユは大きめのつぶてをあてがった。

折りたたみ、紐の両端を手にもって、つぶてが落ちないように気をつけながら大きく振り始める。はじめは腕全体で、おもりにかかる力で拳動が安定してからは、手首のスナップだけで。

ひゅんひゅんと鋭く風をきりながら、先端におもりをのせた紐が少年の頭上で円を描いた。

茂みが揺れた。

唸り声をあげ、やぶからゴブリンが姿をあらわす。モンスターが一步を踏み出す前に、カリユは右手につかんだ紐、その片方だけを離していた。

伸びきる紐に導かれ、直接投げつけるのとは比べ物にならない速度でつぶてが飛んだ。

スリンガー。投石器は猟師を生業とするものにとっては馴染み深い武器である。習熟にひどく手間がかかるのが難点だが、弓を射る力のない子どもにはおあつらえ向きといえた。

放たれたつぶてはゴブリンに当たらず、その横の木に弾けた。軽くない衝突音がして、幹に決して小さくない痕がのこる。

「げ」

うめいたカリユの思いを読んだように、ゴブリンがぞろりとした牙を見せた。人間にはとても笑っているようには見えない、いびつな笑顔だった。

利点の多い投石器ではあるが、難点も多い。習熟の難しさに伴う命中精度の問題はご覧のとおりだが、この場合は連射が効かないという点がさらに重要だった。ようするに、近距離用の武装ではない。

少年の手から武器が失われたことを見て取ったゴブリンが一気に突進してくる。

それに対したカリユも同じく笑った。

カリユの前の地面には仕掛けが隠されている。布を張り、土と草で覆った落とし穴が大口をあけており、そこに落ちた先には、先端をとがらせた木が無数に上向いているのだった。

情けない悲鳴をあげてゴブリンの姿が消えうせる瞬間を待ち構え、しかしカリユの予想に反してゴブリンは罠の直前でぴたりと動きを止めた。

手にした曲剣で地面をさぐる。布がめくられた。

鼻を鳴らしたゴブリンがカリユを見る。どこか得意げなような表情だった。

「……慎重なやつだなあ」

「

」

相手がふがふが言うが、ゴブリン語の素養のないカリユには理解できない。

上辺だけの会話は続かず、ゴブリンが落とし穴を迂回して迫ってくる。あわててカリユはさがり、大木の後ろへと退いた。

大人が三人で囲まなければならないほどの老木にとっかかりを見つけ、足をかける。身軽さはカリユの身上とするところだった。あれよあれよといううちに太い幹を登りつめていく。

「

」！

下からゴブリンが吠え立てるのを見下ろしながら、さてどうしたものかとカリユは思案した。

落とし穴がばれるというのは想定外だったが、こうしたときのための備えがないわけではない。具体的には、残してきたジニイの存在がそれだ。

彼女はおそらく、今ごろは村に戻っているだろう。それなら、話を聞いた大人たちがやってくるのを待つのが一番だった。

日頃、よく勘違いされているように思うのだが、カリユは決して自分のことを無謀だとかいうふうには思っていないかった。やれることとやれないことくらいはわきまえているつもりでいる。

ちびの自分がモンスターに一对一で勝てるとは思わなかった。必殺の罠があっけなく見破られた以上、情けないが大人の助けを待つべきだとわかっていた。

ゴブリンは木登りが得意ではないようで、うなったり手をかけてきたりはしているが、本腰をいれて登って来る気配はなかった。着込んだ防具に手をかける様子がないことでそれは判断できた。

森の中で太陽の位置はわからないが、日が沈むまではまだしばらくあるはずだった。さて、それまでに助けが来るか、下のゴブリンがあきらめてくれればいいんだけど。後者の場合、もちろんカリユはその後を追いかけて、別の罠まで案内してやるつもりでいた。

そんな算段で、木の上に追いやられたカリユだが、決して気分は暗くなかった。のだが、続いて響いた悲鳴のような声に、顔面を蒼白にする。

「カリユ！」

木々のあいだからジニイがあらわれていた。

その背後に大人たちの姿がない。彼女は村に戻らず、カリユたちを追いかけてきたのだった。

「逃げる、ジニイ！」

ジニイは動かない。

新しい獲物に振り返ったゴブリンをにらみつけて、彼の幼なじみはそこから一步もひこうとしなかった。真っ青で震えているのが遠くからでもわかるが、腰が抜けているわけではない。それがカリユにははつきりとわかった。ジニイは、自分を助けようとしているのだ

ジニイが大きく手をかざした。なにかを受け止めるようにひろげた両手がゴブリンへと向けられる。

「ふあいあ！」

力ある言葉に呼応して、虚空に炎が生まれた。

ジニイは魔法使いである。生まれながらの才次第ではどんな天変事象をも可能にするような、ただの村人には珍しい才能をもっていた。

とはいえ　なんの訓練も受けてはいない、見よう見まねの魔法ではあった。大気に満ちたある物質を媒介に生み出されたものは、炎と呼ぶのもおこがましいほどのひ弱ささしかもちあわせていない。ひよろひよろと風に流されるようにして目標に向かった火の玉以下のそれは、ゴブリンの胸当てにぶつかっても焦げ目ひとつ残すことはなかった。

気まずい空気が流れた。

むしろモンスターのほうが申し訳なさそうな案配ですらあった。

「　ッ！」

場を仕切りなおすようにゴブリンが吠えた。声にあてられたジニイの腰がくだける。

カリユはすばやく周囲に目を配った。今から木をおりていては間に合わない。老いた木にからまった蔦を見つけて、手早く引き寄せ

てちぎった。軽く体重をかけて丈夫さを確かめると、そのまま一気に木上から飛び出した。

目算もなにもあったものではない。やはり少年は無茶な性格だった。

しかしそんなことはどうでもよかった。いま、カリユの頭のなかにはひとつのことしかない。ジニイを助ける。どうやって？

こうやって！

鳶を手にして勢いよく滑空。

斜めに弧をえがいて、少年の身体は空を泳いだ。

はじまりの日 2

いくら子どもとはいえ、全体重をかけられた鳶が耐えきるかなどわかったものではない。途中で干切れないにしても、なにしろぶっつけの行動である。シミュレーションもなにもない。

一本の鳶を頼りに飛び出して、自分の身体がどのように運ばれるかという計算があつたわけでもなかった。そもそも、そのために必要な知識がない。ただ、鳶にぶらさがって飛び出した先に運良くモンスターが近づいてくる幸運を、カリユは普段あまり熱心に祈ったこともない神さまに感謝した。

「ジニイに、手をだすなあああ」

鳶を持ったままでは、直接ゴブリンにまでは届かない。加速の最下点を越え、視点が上向いた瞬間に手を離して、そのまま宙を舞った。

横合いから体当たり。ゴブリンと一緒にたにもつれた。

受けた衝撃は大きかったが、不意をつかれなかった分、カリユのほうダメージは軽減されている。地面を転がってなんとか受身らしいものを取り、ふらつきながら立ち上がった。

「カリユ！」

駆け寄ってきたジニイは涙目だった。

「バカ！　なんで村に行かなかつ」

「ただ、と言い切ることができなかった。わきばらに衝撃を受け、カリユは痛みを感じる前に身体ごと吹き飛ばされていた。」

息が詰まる。全身がしびれて受身を取れず、顔をこすりながら地面を滑った。土のにおいをかぐことがなかったのは、呼吸自体ができていないからだった。遅れて響いた激痛に身悶える。

「カリユ！」

涙にぬれた視界に、自分に駆け寄る幼なじみの姿が見えた。その後ろに、奇襲を受けて平然とした顔のゴブリン。

「カリユ、カリユ！」

助け起こされながら、いまだに呼吸はととのわず、息もたえだえにカリユはジニイに告げた。

「……火、出して」

「はやく　はやく逃げようよう」

「だせ！」

びっくりと肩を震わせたジニイが、目を閉じた。ぽうつと頼りげのない火の玉が生まれた。

それを見たゴブリンが愉快そうに歯を鳴らした。速度もなければ威力もない。追い詰めた獲物を前にして、完全にあなどった態度だった。

上等だ。歯を食いしばり、カリユは立ち上がる。ふらりとよろけそうになるのを横から支えられ、つつけんどんに突き放した。

「ジニイは村にいつて」

「カリユ……」

「大丈夫」

にやつと笑う。完全にまるつきり、どこからどうみても強がりではない笑みだった。

「戦利品、持って帰るからさ。　できれば誰か呼んできてくれたら嬉しいけど」

はつと気づいた様子で、ジニイが唇を噛み締めた。うなずく表情に後悔の影がさすのを吹き飛ばすように少年はもう一度笑った。

「ほら、いつて！」

言いながら、自分はゴブリンにむかって駆け出した。

手には取り出したつぶてがいくつか。腰の袋はすでに空っぽで、弾はいま握った分だけで全部だった。

予備動作が必要なスリンガーは使えない。痛みのある身体では投てきも満足にできない。いや、たとえカリユの五体が満足でも、たかたが子どもの力で投げつけた石ころでは、よほど幸運に恵まれない限り相手を昏倒させることはむずかかった。

そんなやぶれかぶれに、命を賭けるわけにはいかない。自分のものだけならまだしも。今はまだ、すぐ近くにジニイがいるのだから。

少年を迎え撃つようにゴブリンが棍棒をかまえる。その途中、ふよふよとたよりなく宙をいく火の玉が見えた。相手との直線上にあつて邪魔なそれを、カリユは虫を払うようにあいた左手で握りつぶした。

貧弱とはいえ、火である。てのひらに激痛が走った。視界がにじむ。

しかし、ぬぐえば敵が見えなくなる。目を閉じれば隙ができる。だからカリユは涙を流しながら歯をくいしばってその痛みに耐え、渾身の力で右手を振りかぶった。

つぶてが放たれる。

ゴブリンはあっさりと盾で防いだ。

棍棒での反撃。大上段からの打ちおろしで振り下ろされる。

ぎりぎりのところで避ける。手持ちの武器を使い果たしたかに見えたカリユは、そこからさらに踏みこんだ。加速して飛び上がる。

右手に残ったつぶてはない。徒手で殴り合おうという無茶でもない。それよりはもう少しだけ、ましな考えだった。

武器ならまだ残っている。

それを、カリユはさきほど手に入れたばかりだった。

重い棍棒で地面を打ち、前のめりにゴブリンの頭がさがっていた。もともと小柄なこともあり、その顔面はカリユの身長でも手が届く範囲にあった。

カリユは腕を振るった。

振るわれたのは利き腕でもなければ握りこぶしでもなく、掌ていのふうになっているのは、拳が傷むのを避けたからでもなかった。手のひらに包んで燃える火の玉以下のそのかたまりを、カリユはゴブリンの目めがけて押しつけた。

耳をつんざくような悲鳴がほとばしった。

貧弱とはいえ、火。生木を燃やすどころか、枯れ木相手の火種にもなりそうにないそれだったが、さすがに目にぶつけられてはただではすまない。

とはいえ、ダメージは期待できない。せいぜいびっくりさせて、ひるませるくらいが関の山だった。

息をつく間も惜しみ、カリユは無防備に急所をさらした相手の股間を蹴り上げた。

今度こそ痛みによる悲鳴。右手の武器をとりおとして、ゴブリンはその場にうずくまった。

地面の棍棒を遠くに蹴り飛ばし、カリユはすぐそばに垂れ下がった蔦をつかんでゴブリンの足に結んだ。その腰に短剣を見つけ、手を伸ばす途中でゴブリンが腕を振るった。

片腕でなぎ払われ、ごろごろとカリユは地面を転がる。

「へへっ」

立ち上がったその口元に笑み。手には間一髪、ゴブリンの腰から手に入れた短剣が鞘ごと握られている。

「っ」

「やだよ。返してほしければ、かかってこいよ」

憤慨した形相に挑発した口調で応えながら、ちらりと背後の様子をうかがった。

ジニイの姿はない。森をいく足音も聞こえない。

よし、とカリユは安堵の息を吐いた。これで最低限、果たすべき目的はクリアした。

さあ、どうする。逃げる？ それとも

胸中の問いに、少年は無言で鞘から短剣を抜き払った。

「おのこよの」

不意に響いた言葉に、ぎよつとカリユは周囲を見渡した。

誰の姿もない。声ももうない。幻聴か、と思ったところで、ゴブリンが吠えた。

「！」

突進してくる。少年の油断をついた格好だが、数歩走ったところで結われた蔦につんのめった。

態勢を崩したゴブリンの隙を見逃さず、カリユは飛び掛った。

腰だめにかまえた短剣で、身体ごとぶつかる。

狙いははずれようがなかった。胸当ての脇をねらった短剣の刃がモンスターの身体に突き刺さる。

しかし、それでもその一撃は、致命傷にはほどとおい深さでしかなかった。

「！」

至近距離で振るわれた拳がカリユの身体を吹き飛ばした。

意識がとびそうになるのをこらえて、身体を起こす。張られた頬が熱かった。口の中に血の味が広がっている。手には短剣がなくなっていた。

「おろかでもある。連れの逃げる時間をかせぐのが目的だったはずなのに、どうして逃げださんかった」

再び、声。今度はカリユは意識を揺さぶられなかった。

幻聴か、あるいは森で人間を惑わすという妖精のささやきか。確かに耳に聞こえるその声を無視した幼い眼差しは、一心に目の前のモンスターに向けられている。

怒り心頭のゴブリンが、自分の血に濡れた短剣で鳶を切り払った。

さあ、どうする。

あやしく響く声とはなんら関わりなく、この場に至って、逃げ出すという選択肢はカリユにはなかった。

畏はばれ、武器はつき、目の前には傷ついてなお強大な敵が立つ。それでも自分を奮い立たせるものがなにか、カリユはふと不思議に思ったが、深くは考えなかった。

身体の奥に熱いなかたぎっている。それをなんと呼ぶものか、知っている気がした。

父が、祖父が言っていた。

なにがあっても、それだけは決して失くすなど。

女を守る。モンスターと戦う。男が男であるために必要な、その偉大な感情の名は

「あほう。そんなものは勇氣といわん。蛮勇というのよ」

声に、わずかに怒気がこもったように聞こえた。

ゴブリンの咆哮。

カリユも雄たけびをあげて応えた。今度こそなんの策もない徒手空拳。握った拳でゴブリンに立ち向かい、その目の前で、不意にゴブリンの全身が火を噴いた。

「……っ、……！」

火柱が荒れ狂い、熱気のカリユの髪を灼く。

やがて火が収まったあと、声もなく崩れ落ちたゴブリンは完全に炭化してしまっていた。皮膚を焼く程度ではない。ジニイの生んだものとは比べようもない、圧倒的なまでの火力。

ぞつと身を振るわせたカリユは、見知らぬ何者かが立っていることに気づいた。

麻織りのローブに身を包んだ、旅人の装いをした人物だった。フードに隠されて顔までは見えなかったが、流れるような銀髪と浅黒い肌がのぞいている。声で女性だということはわかった。

「あ、ありがとう　ございます」

冒険者。魔法使い、本物の。恐れと感謝をないまぜにして頭をさげるカリユに、その女性はふんと鼻を鳴らした。

「ぬしゃあ、こんなことをいったい何度くりかえしておるのかよ」

「え？」

質問の意味がわからず、きょとんとする。苛立たしそうな舌打ちが聞こえた。

「……まあいいわ。このあたりで腹に怪我をした女を見んかったか？　竜でもかまわん」

竜。そんな大層なモンスターなど、見たことがあるはずがない。

激しく首を振るカリユに、女性はならどうでもいいとばかりに背中を向けた。

「はよう帰れ。女を泣かすな。せつかく助けてやった今生ぞ。ありもしない頭で考えられるなら、次に捨てるときはもう少しマシに扱うがいい」

言い捨てて、女性は森の奥へと消えた。

残されたカリユはしばし呆然と女性の消えたやぶを眺めて動けずにいた。

緊張がとぎれたせいで頭が働かない。

どうやら命拾いをしたらしいという実感も沸かず、全身には奇妙な空虚感があった。敵を倒したのは少年ではないのだから、それも当然かもしれない。

どれほどのあいだそうしていたか。

自分の名前を懸命に呼ぶ声を遠くに聞き、カリユはようやく茫然自失の状態から回復した。

ジニイの声だった。大人たちもいる。村から助けがやってきたらしかった。もう、その必要はなくなってしまうていたが。

村の方角へのろのろと歩きはじめ、その途中で思い出したようにゴブリンを振り返った。

モンスターのは死骸は完全に消し炭と化してしまっている。戦利品など手に入る様子ではなかった。

そのことに残念さをおぼえるのでもなく、カリユはその場から離れてジニイたちとの合流をはかった。

もう一度振り返る。執着はゴブリンではなく、そこで出会った旅人、正確にはその言い放った台詞に残っていた。

ほどなくしてジニイに引き連れられた大人たちと合流したカリユは、さんざんに叱られた。

父親がわりのジニイの父親から思い切りどつかれ、村に帰ったら親父さんからもっと殴ってもらえとおどされてげんりとなる。

しかし、村の大人たちはカリユの身を案じてのことだったから、それがわかるカリユはごめんなさいと頭をさげることしかできなかった。

彼が一番対処に困ったのはジニイだった。

涙をいっぱいにとって抱きついてくるジニイをもてあましながら、カリユは危ないところを冒険者風の相手に助けられた事情を大人たちと話した。

今日、カリユが出るまで、村にそうした冒険者は来ていないはずだった。自分がいないあいだに訪れたのかと思っただが、大人たちはそんな人物は宿にも来ていないという。

ということは、これから来るのか。それとも近くに寄っただけかもしれない。

寄ってくればお礼をするんだがなあ、と残念そうな大人たちに囲まれて護られながら、カリユとジニイは村への帰路についた。

お礼。そう言われて、それならまた話ができるかなと考える。もちろん、当の本人がまずお礼を言わないといけないのだけれども。

しかし、カリユにはそういうことにはならないような気がしてならなかった。

もう自分はある人と出会えないという予感があった。

理由はない。なぜそんなふうに思うのかもわからなかった。勘と intuition しかない。

そして、それを残念とも、やはりカリユは思わなかった。

頭ではさきほど聞いた台詞、そのなかの単語が強く残っている。

竜。

竜が、いる？

はじまりの日 3

村に帰って父親からげんこつをもらったあと、カリユは涙目でふたたび森にもどっていた。

みんなを心配させた罰として枝拾いを命じられたのだった。ついでにジニイが落としたかごも中身ごと拾ってこいといわれている。

一緒に怒られるべきのジニイは一言も怒られず、村で家事の手伝いをするように言われていたから、これは絶対にジニイひいきだとカリユは思うのだが、ゴブリンを二人で追いかけるようにいったのは自分だったから文句はいえなかった。

近くにはまだはぐれモンスターがいるかもしれないなかった。本当にあれがはぐれであつたかどうかわからない。村の大人たちは手があいたもので森に見回りにでていた。

モンスターがふらついているかもしれない状態で森にいかされるのは、カリユ一人であればすくなくとも逃げ出すことはできるという信用であるはずだったが、当の本人はそうは思っていないかった。

どうせ怖い目にあえばいいと思ってるんだ。ふてくされた気分を考える。

痛みをかんじて見おろした左手には包帯がまかれている。ゴブリンと対峙したとき、ジニイの放った火の玉をつかんでできた火傷は、母親の手から薬草をぬられていた。

包帯をまきながら眉をひそめて黙っていた母親の表情を思い出し、なんともいえない罪悪感におそわれる。

仕方ないじゃないか、とカリユは内心で言い訳をはじめた。

ほかに武器がなかったんだ。ジニイが逃げ出す時間をつくらなければならなかった。ジニイをまきこんだのはたしかに、自分だったのだから。

だから、手でにぎりしめたくらいでは消えないとわかっている火の玉をつかって、ゴブリンの顔面にぶつけてやった。べつにつくりたくってつくった傷じゃない。必要だったから、そうしたんだよ。脳裏にうかんだ母親の顔は、悲しげなままなにも言わない。実物と同じだった。

カリユの母親はいつも、彼が怪我をして帰ってきててもなにも言わなかった。ただ黙って、自分がその怪我をして痛いような表情で治療をしてくれる。

その顔を見るたびにカリユはもうしわけない気分になる。

けれど怪我をしたのにはいつだって理由があったから、でもそれを口にしたって母親の表情がかわるわけではないこともわかっていながら、カリユも黙って手当てをうける。

しょうがなかったんだよ。口にできなかった言い訳をカリユは続ける。男なら言い訳をするなと父親からきつくいわれていたから、彼はそれをぐつと我慢していた。

どうして逃げ出さんかった。

無言のままカリユを非難する想像の母親にかわって、声がひびいた。

顔もおぼえていない（ローブに隠れてほとんど見えなかったから、当然だった）魔法使いの言葉。まるで彼の母親の気持ちを代弁するように、声がいった。

そんなものは勇氣といわん。蛮勇というのよ。

むずかしい言葉はよくわからなかった。

あの時、カリユはなにを考えたわけでもなかった。火の玉をつかった奇襲が成功して、そのあと。

たしかに逃げ出すことだってできただろう。カリユは逃げ足に自信があった。ゴブリンを足止めして、そのまま村にかえって大人たちに助けをもとめることもできたし、べつの罾のところにつれていくのもいい。

それをしなかったのに、理由があるわけではなかった。

なんとなくそうするべきではないのかと思った。カリユの心でなにかがささやいた。そうとしか思えないほど自然に、身体が勝手にうごいていた。

あの魔法使いは、まるでそれを怒っているような口ぶりだった。

……よくわからない。よくわからないし、不満もいっぱいだったが、それで母親に悲しそうな顔をさせてしまったのはそのとおりなので、そのことをカリユは反省した。

次はうまくやろう。罾も、逃げ方も。

ああ、ゴブリンくらい、格好よく正面から倒せるようになりたいなあ。

ちびで非力なカリユは考える。彼の腕はほそくて、弓をひくことも剣を振ることも満足にできなかった。子どもでもモンスターを倒せるのがスリンガーの強みだが、十分に重さと速度をのせるチャンスは早々あるわけではない。

それか、魔法とか。

さつき見たばかりの光景をおもいだして、カリユは全身をあわだてた。恐怖と興奮が一気によみがえった。

天をつき、そのまま森を燃やし尽くさんとする炎の柱。それでいてゴブリンだけを正確に燃やし尽くしたあれこそが、まさに魔法の業というべきしろものだった。

幼なじみの放ったような、手につかめる火の玉なんて比べ物にならない。

魔法さえ使えれば、非力かどうかなんて関係ない。カリユは熱望

してやまなかったが、どうあがいても無理な願いでもあった。魔法とは生まれながらにして、素養のあるながはつきりしているからだった。

どうして自分は魔法をつかえないんだろう。

昔はそのことを怨み、悪くもない両親に泣きながら文句をいい、素養のある幼なじみをねたんだりしたこともあるカリユである。

いまでは使えないものは使えないんだからしょうがないさ、と半ばあきらめの境地にいるが、それでも実際に目の前の魔法のすごさを見せつけられてしまうと心が揺れる。

ちよつとした場面をカリユは想像する。

突如、村に迫りくるモンスターの大量。領主からの援軍はなく、村は大人たちが懸命にあらがうが、敵の数は視界をうめつくすほどに多い。

誰もが絶望したそのとき、モンスターの一群が火に包まれる。

突然のことに驚き、周囲を見渡すモンスター。それを見下ろして、颯爽と登場する自分　　そういう子どもっぽい空想だった。

八面六臂の大活躍を思うままに頭のなかにえがきながら、森をいくカリユはやがてゴブリンと遭遇したあたりにたどりついた。

彼らが隠れていたやぶのそばに、見おぼえのあるかがが転がっている。

その近くには、ジニと二人で午前中に拾い集めた木の実や、染色や小物作りに使える拾得物があって、赤色のなにかがもぞもぞと動いていた。

ぎよつと身体をすくめ、カリユは足を止める。

赤色のそれは生き物だった。

モンスター。小さい。翼が見える。トカゲを少し大きく、丸くしたようなその姿かたちについて、カリユは見たことはなかったが、話に聞いたことがあった。

「ドラゴン……？」

それは神話のおとぎ話や詩人の唄にでてくる、伝説のモンスターだ。

その羽ばたきが空をつくり、一吐きが火をうみ、こぼした涙から川がうまれたという。この世界をつくった存在と詠われる、それは想像上の生物であるはずだった。

それが、カリユの目の前にいる。

もちろん、それがドラゴンであるという確証はない。見たこともないのだからあたりまえだった。ドラゴンに子どもがいるなどという話も、聞いたことがなかった。

カリユのつぶやきが聞こえたらしく、そのドラゴンらしき見かけの生物が振りむいた。威嚇するように口をひらく、その全身が細かくふるえているのにカリユは気づいた。

「怪我、してるのか……？」

ぴぎゃー。応えるように鳴いた声が弱々しい。

カリユはそつと近づいた。すぐ近くに見下ろしたドラゴンの腹から青い血が流れていた。

やはり怪我をしている。それなりに深い傷に思えた。ドラゴンの近くには食いかけの木の実が散乱していて、傷を癒す力をたくわえるために、食べ物をとろうとしているのだとカリユはわかった。

首をもちあげてカリユをにらむようにしていたドラゴンが、それさえもおつくうとばかりに地面に伏したのを見て、カリユは反射的に動いていた。

かごを拾い、そのあたりの木の实や葉っぱや木の皮を集める。そ

して、即席のベッドが作られたそのなかにドラゴンをかかえて寝かせた。

ぴー、とドラゴンは暴れたが、すぐに大人しくなった。

カリユはかごを揺らさないように気をつけながら走り出した。

向かう先は村ではなかった。

ドラゴンは、モンスターだ。ゴブリンのように人を襲うという話は聞いたことがないが、悪いドラゴンやその退治話は、子どもの頃から寝るときによく聞かされていた。

そのドラゴンの子どもを連れ帰ったら、大人たちがどんな反応をするか。決して歓迎はされないだろう。もしかしたら、殺されてしまいかもしれない。

そんなことをさせるわけにはいかなかった。

大人たちに見つからず、ドラゴンをかくまえる場所におぼえがあった。

自分の命を救ってくれた冒険者。その去り際にかけられた言葉も頭には思いつかばず、カリユは懸命に手足をふった。

カリユが訪れたのは村のはずれ、ひっそりとたたずむ木小屋だった。

一目するだけでたてつけの悪さがわかる。小屋はここに住む人間が誰の助けも得られず、一人で立てたものだった。

扉を叩く。

声をかけたが、返事はなかった。かまわずカリユは扉をひき、室内に入った。

小屋のなかは薄暗かった。

まだ日が落ちていないのに暗いのは、小屋の立地と設計に問題があった。採光窓も閉められている。その奥、部屋の片隅に小屋の持ち主が壁に背を預けて座り込んでいた。

「ナオミ、大変なんだ！」

呼びかけられても、その相手はほとんどなんの反応も返さなかった。顔を持ち上げてカリユを見る瞳に輝きがないのは部屋が暗いせいではない。

ナオミという名の茶髪の女がカリユの村を訪れたのは、一月ほど前のことだ。

怪我をして、服装はぼろぼろで、その表情にはまるで生気がなかった。村の大人たちは彼女を歓迎しなかったが、金を払われては宿にとめないわけにはいかなかった。

陰気な女は、一週間ほど宿で身体を休めた。そのあいだ、誰かと言葉をかわすことさえなかった。ぶつぶつとよく独り言をつぶやいていて、それがますます村の連中を不安にさせた。

やがて、ナオミは村のはずれに住み着いた。小屋をたてる彼女を手伝う村の者はいなかったが、やはり文句を言う大人はいなかった。ナオミと話す村人はカリユだけだった。

というより、ナオミに話しかける村人がカリユだけだった。ナオミのほうからはカリユに声をかけたこともなかった。

カリユはナオミの秘密を知っていた。

以前、森で助けてもらったことがあるからだ。今日彼を助けてくれた冒険者のように、ゴブリンに襲われて危なかったカリユは、ナオミがモンスターを一撃でほうむりさるところを見て、その見事さに心をうばわれた。

ナオミは冒険者だった。

本人の口からきいたわけではないが、ゴブリンを叩ききった動き

はただの素人のもものではありえなかった。

世界を股にかけて旅をする冒険者が、どうしてこんな辺鄙な村にいて、一人で外れに住んでいるのか。聞きたいことはたくさんあったが、ナオミはほとんどなにも言わなかった。声を聞いた事も、ほんの数回くらいしかない。

今ではカリユのほうでも、無理をして事情を聞こうとはしていなかった。

そんなことをしなくとも、彼にとってナオミが命の恩人であることは変わらないからだった。友達だとも思っていた。そして、もっとも身近にあこがれる存在でもあった。

ナオミはいつもそうしているように、部屋のなかで呆然と暗闇を眺めているような表情だった。かまわずカリユは続ける。

「水と、包帯あるっ？ 怪我、してるんだ」

ナオミの反応はない。カリユは言った。

「ドラゴンなんだ！」

ぴくり、とナオミが震えた。

「ドラゴン」

「そう、ドラゴン！ 森で見つけて、怪我してるんだ！ 水と、包帯をちょうだい！」

ナオミがのろのろと起きあがった。

近くの棚から布を取り出し、水入れの桶を持ってくる。

「ありがとっ」

礼を言つて、カリユは布を水にひたして、そっとドラゴンの傷をぬぐった。

ぴぎゃー。

「ごめん、ごめん。ちょっと我慢してよ」

ドラゴンの苦情を聞きながら、血を綺麗にぬぐって布を洗い、怪我のあたりに柔らかくおしあてる。止血の効果くらいはあるかもしれないなかった。

「どうしよう。ナオミって、回復魔法とか使えたりしない？」

カリユが手当てをする様子を黙って見つめていたナオミは、小さく首を振った。

そっか、とカリユはため息をほく。ナオミが魔法を使えるとは聞いたことがなかったが、もしかしたらと思ったのだった。

回復魔法を使えるほどの魔法使いは少ない。村には一人もいなかった。

ふと、カリユは昼にあつた魔法使いのことを思い出した。それと同時に、違うことも思い出す。

「竜」

竜を見なかったかと聞かれた。あの人が探していたのはこのドラゴンのことなのだろうか。

でも。近くには、他には誰もいなかったけれど。

「竜」

繰り返すように、ナオミが言った。

隣の彼女をあおぎみて、カリユははじめてナオミの異常な様子に気づいた。

それまではいつも、どんなことにも反応をかえさず、抜けがらのようだったナオミが、食いいるような形相でかこのなかのドラゴンを見つめている。

「うん。すごいよね。俺、はじめて見るよ」

はじめて見るナオミのはっきりした反応に嬉しくなって、カリユは笑いかけた。

ナオミは声が聞こえない様子で凝視している。

その唇がなにかをつぶやいているが、カリユには聞き取れなかった。

「……大丈夫かなあ。こいつ、怪我が深いみたいだけど」

伝説のモンスターといわれるドラゴンへ、どういった手当てが有効かなど知るはずがない。ドラゴンの体力に期待するしかなかった。食べ物、かこのなかにある木の実でよいだろうか。

「ナオミ。こいつ、ここにかくまってもらえない？ 村だと多分、大人たちがうるさいから」

ナオミがカリユを見た。

あんまりにも見かけに気をつかっていないけれど、髪を切って櫛をいれて、綺麗な服を着ればナオミは絶対に美人だとカリユは思っていた。

だつてほら、すごくまつげが長い。少し濁つたような半透明の視線を受けて、どきりとする。返事のないままにナオミはカリユから視線を外した。

それをカリユは了承であると受け取った。

「それじゃ、よろしくね。俺、様子を見にくるから。パンかなにかも持つてくるね」

カリユはこれまでに度々、ナオミにそうした差し入れを持っていた。

ふたたびドラゴンに視線を向けたナオミに声をかけて、カリユは扉に向かった。

村に戻るのが遅くては心配されてしまう。

かごはドラゴンの寝床にあてがわれているから、それをどうジニイに説明しようか考えながら、カリユはナオミを振り返った。

「それじゃ、またね！ ナオミ」

返事をたしかめず、小屋から出ていった。

ナオミと呼ばれた女は、少年がいなくなったあとも一人、じつとドラゴンを見下ろしたまま動かなかった。

その唇がなにかをつばやいている。

やがて、そこから伝播するように、女の肩や手、全身が震えだした。

なにかをつばやき続ける、その表情に浮かんでいるのははっきりとした恐怖の感情だった。

その夜。

カリユの村のまわりにひろがる森で火事が起きた。

はじまりの日 4

夕暮れが一足はやく森にかげりをしのばせる。

村はずれにたったほったて小屋で、その小屋の持ち主の女はがたがたと震えていた。

室内はほとんど夜のように暗い。

小屋の中央、斜めにかしいだ机のかごに横たわるもの。そこからほのかな光がたちあがっている。

苦しそうに腹を上下しながら、小さなドラゴンは呼吸をくりかえしていた。

全身を発光させているのは、呼吸ごとに力を取りこんでいるからだった。

マテルと呼ばれるこの世界にみちた力。どこにでもあり、いくらでもあるその源を、小さな生命体は身体の回復にあてている。

魔法ではない。そう意識するほどのものでもない。

彼らにとってそれを活用する術は、呼吸するのと同じくらい自然に、生まれつきそなわっているものだった。

あたりまえだった。

なぜなら、彼らはマテルそのものなのだから。

震えながら見守るうちに、ドラゴンはますますその輝きをましてきている。

赤色のマテルはドラゴンの属性をあらわしていた。

火の竜。力のサラマンデル。それはこの世界をつかさどる存在だった。

ちまたでは伝説としか噂されないが、それが実在することは冒険者たちのあいだでは常識だ。

彼らの目的は多くがその存在にあった。

たくさんの冒険者がそれを探し、それと戦った。

ドラゴンに挑んだ冒険者の数はそのままそこで積み重なった死者の数にひとしい。

彼らは叫び、悲鳴をあげ、笑いながら命を散らせていった。

雪辱の呪いを吐き叫び、塵のようにあつさりと命を散らしていく。それが冒険者という人種だった。

竜がそうした存在であるように、彼らもまたそういう存在だった。

女は違った。

歯を打ち鳴らして恐怖におののくその目に過去の光景が思い浮かんでいる。

天をさき、地をくだき、海をわるその異能。

目の前に立つただけで魂ごと心胆をけずりとられるその圧倒的な存在。

頭をかかえて神の慈悲をとねえ、ただ周りの仲間が事切れる断末魔だけをきく。

気づけば女は逃げ出していた。

恐ろしかった。ただ恐ろしかった。

そうして流れ着いた村。すべてを放り出してたどりついたその逃げた先で、いま女の目の前にそれが横たわっている。

逃げ出すことなどできないのだ。絶望の気分で女はうめく。

そうだ、それはそうだ。だって、なぜなら、彼らはこの世界そのもののなのだから

ドラゴンの視線がさまよい、彼女を見た。
口を開く。

ひ、と息をのみ、女はとびすさって尻餅をついた。

ぴー。

灼熱の炎が吹き荒れることなく、かわりにか弱々しい声がないたのろのろと立ち上がり、女はかこの様子をうかがった。

ぴー。またドラゴンがないた。はかない声だった。

お礼をいつているようにも、助けをもとめているようにもきこえた。

女は呆然とそれを見下ろした。

信じられなかった。

あのドラゴンがそんなか弱い声をだすことに、耳をうたがった。

ドラゴンと目があう。そこにあつたのは他者をみとめる視線だった。

彼女を見下ろして蟻をふみつぶすように無機質な瞳を向けていたあの生物が、自分を見あげている。

それは彼女のなかに凝り固まった恐怖をやわらげるのに十分だった。

女の頬を涙がつたって落ちた。

なぜ自分が泣いているかわからなかった。

そつと手をのばす。ドラゴンに触れた。

火竜の子は抵抗しようとしなかった。その力がなかったただけかもしれない。だが理由はどうあれ、たしかに女はその身体にふれた。

温かい。
鼓動がした。

凍土の氷がとけるように、女のなかでなにかがくずれた。
ああ、そうか。

彼らも同じなのだ。そしてこんなにも違う。そう、違うのに、同じなのだから。

なら、自分だってきつとこうなれるはずだ。

女は笑った。

滂沱のごとく涙をながしながら笑った。喜びと悲しみがないまぜになった表情だった。

しばらくして、室内を完全な暗闇がおおいつつんだ。

深夜、父親の手でたたきおこされたカリユは、すぐに異様な雰囲気
気に気づいた。こわばった父親になにかあったのかもたずねられず、
村の外、寄り合いなどに使われる広場に向かう。

そこにはすでに他の村人たちが集まっていた。

空をみあげたカリユは目をみひらいた。村の周囲、あちこちの方
角が明るかった。

「カリユ……」

ジニイがそばにやってくる。寝起きだから髪がおりている。

不安そうに服のすそを掴んでくる幼なじみの手をにぎって、カリ

ユは大人たちの様子をうかがった。

誰もが混乱していて、口にする言葉はどれも錯綜していた。カリ
ユは村長の姿をさがした。

「みんな、聞いてくれ！」

声を張り上げたのは村長ではなく、若い村人のでリーダー各になつてゐる男だつた。

「森火事だ！　どうも一箇所じゃないらしい！　このままじゃ森が危ない。風の吹き方によつちやあ、村も巻かれるかもわからん！」
ざわざわと村人がざわめいた。

「理由はわからん！　今日、子どもたちがゴブリンを見かけたつて話もある！　もしかすると、モンスターの群れの襲撃があるかもしれない！」

いつそう強いざわめき。

大人たちがカリユとジニイを見た。

なかには非難じみた眼差しもある。昼間の出来事が、この事態を招いたのではないかと思つてゐる相手がいた。

大人たちの視線から守るように、カリユはジニイを自分の背後にかくした。

「まだ間に合うようならだが、森をまもらんといかん！　モンスターの襲撃に備える必要もだ！　男たちは二手にわかれてどつちかを頼む！　女子どもは万が一のために、家の荷をまとめて避難の準備をしてくれ。それぞれの指示は自警団がとる。警団、班分けするから集まれ！」

大人たちが動き出す。

心配そうなジニイにうなずきかけて手を放し、男たちのあとに続こうとしたカリユは、父親の手で頭をおさえつけられた。

「お前はあつちだ」

父親がそうあごをしゃくつたのは、女子どもが集まりだしている場所だつた。

「俺、子どもじゃないよ！」

むっとして見上げるカリユに、無愛想で評判の父親は静かにうなずいた。

「わかつてる」

頭をくしゃりとして、

「お前はジニイを守れ。母さんを頼む」

まだ納得できない様子でいる息子に言った。

「男だろう」

「男だよ！」

父親の大きくて重い手を頭からふりはらい、カリユは言った。

小さく笑った父親が、ぽんぽんと頭を叩いてなでた。

「なら、頼むぞ」

「……わかった」

不承不承、カリユは返事をして父親の背中を見送った。

ぎゅっと拳をにぎりしめる。

もつと背が大きければ。力が強ければ、ぼくだって

ぎゅっと彼の手をつつんだのはジニイだった。

怖いだろうに、それを我慢している。必死に年上らしくあるうと
しているのだった。

カリユは大人たちと一緒にいけなかった残念な思いをおさえつけて、
自分が父親にされたように幼なじみの頭をなでてやった。

気が強くてしっかり者。だけど本当は怖がりな彼の幼なじみは、
泣きそうな表情で目を細めて、それをごまかすように強く手をにぎり
しめた。すごく痛かった。

自分のできることをしよう。

そうカリユは自分に言い聞かせる。いつか父親のように背も伸び
て、手も大きくなるんだから。

今は隣にいるこの幼なじみの小さな手を守っていよう。ふと脳裏
になにかがよぎって、カリユは空をみあげた。

星がきれいな夜空。四方がうつすら赤い。

はっとカリユは思い出した。

「ジニイ、ごめん。俺、ちょっと行ってくる」

「え？ あ」

「すぐ戻るから！ 大丈夫って、母さんにいつてて！」

「カリユ！」

幼なじみに手を振りながら、村はずれに走った。

小屋は炎に包まれていた。

巨大な焚き火となつて、轟々と火の粉をまきちらしながら燃えている。その手前に、立ち尽くしている人物がいた。

「ナオミ！」

声をかけながら、カリユは自分の勘違いに気づく。

小屋の手前、炎に照らされた濃い影のようなその相手は、立ってはいたが尽くしてはいなかった。

笑い声がひびいていた。

はじめて聞く、とても楽しそうな笑い声。

それを耳にしたカリユはなぜか嫌な予感をおぼえた。

「……ナオミ？」

女が振り返った。

輝くような笑顔だった。逆光のはずなのに、カリユにはそれがはつきりと見えた。

「ああ、カリユか。どうした？ こんな時間に」

はきはきとした口調にとっても違和感がある。

「火事、いや、そうじゃなくて、小屋が！」

「ああ これか。いや、いいんだ」

爽やかな表情で彼女は言った。

「もつからないからな」

「いらないつて」

絶句して、すぐにカリユはそれどころではないことを思い出した。

「ナオミ、あいつはっ」

「あいつ？」

「今日のお昼、連れてきたドラゴンだよ！ まだ中にいるのっ？」
不思議そうな小首をかしげるのに、苛々としながら訊ねる。

ああ、とうなずいてナオミは答えた。

「あいつならここにいる」

「そうなんだ」

ほっとして、すぐにカリユは顔をしかめた。

ナオミのそばのどこにも、かごも、ドラゴンの姿も見えなかった。

「……どこ？」

「だから、ここだ」

ナオミは自分の胸に手をあてて言った。

服のなかに隠してるんだろうか。おもわずまじまじとふくらみを見てしまつて、そんな馬鹿なとカリユは頭をふつた。

「……えっと、どういう意味？」

「察しが悪いやつだな」

朗らかに微笑んで、ナオミは答えを口にした。

「あいつは、私が食べたよ」

「え？」

間の抜けた声をかえすカリユに、ナオミは手を差し出した。上向きのてのひらに、灯りがうまれる。赤い火だった。

「ふふ。力ある言葉もいらない。すごいな」

楽しげに言う彼女の口元、灯りに照らされたそこが青色にぬれていて、カリユは気が遠くなるのを感じた。腰が砕けてへたりこむ。

「どうした、大丈夫か」

ナオミが近づいてきてカリュを立たせてくれた。温かくて、力強い手。

その温かさは、彼女のものではないような気がカリュにはした。

「本当、に。食べちゃった……の？」

ナオミは満面の笑みでうなずいた。

「ああ。食べた」

聞き間違いではありえない。ふたたび、カリュは地面にへたりこんだ。

「どうした。怪我でもしてるのか」

「怪我って」

怪我してたのは、あいつだ。あのドラゴンだ。

だから連れてきた。かくまってもらおうと思って。村じゃ怒られるから、ナオミの家なら安全だと思って

「ステータスに異常はないようだが。どうした、カリュ」

「どうしたじゃないよ！」

カリュは声をはりあげた。

「なんで、そんな。食べたって、どういふとき、ナオミ！」

きょとんとして、ナオミは綺麗なまつげをまばたかせた。

「なにを怒ってるんだ？」

不思議そうに続ける。

「ドラゴンだぞ。あれがどういう存在か、お前たちだって知ってるだろう？」

「そう、だけど。だけど、食べたって……」

「お前たちも牛や豚を食べる」

「そうじゃないよ！　だって、友達なのに！」

「友達？　ドラゴンが？　おかしなことを言うやつだな」

くつくつとナオミは笑った。

とても綺麗な笑みだった。やっぱり、ナオミは美人だった。だからこそ、カリユはそれがとても恐ろしく思えた。

「ああ　ドラゴンだけでなく、私もそうだと思ってきていたのか。カリユ、お前は優しいな。そして変わってる。はじめて会ったよ、お前のようなのには」

そつと頭をなでられて、カリユは後ろにさがってそれから逃げた。ナオミは笑い続けている。

「でも、それは勘違いだ。ドラゴンとは友達にはなれない。私だってそうだ」

カリユは顔をしかめた。

「なんで、そんなこと言うんだよ」

「違うからだ」

ナオミは言った。

「ドラゴンとお前は違う。私とお前も、違う。それなのに、友達になれるはずがないだろう。互いのことがわからないのだから」

「そんなの！」

「わからないじゃないか　か？　いいや、わかる。試してみようか。指定。ララパタ村はずれの小屋。対象2」

ナオミがなにかを口にした次の瞬間、カリユは大きな力で吹き飛ばされていった。

悲鳴をおしころして、受身を取ろうとする。予想した痛みがいつまでたつてもこなかった。目を開ける。

ナオミの姿が遠くになっていた。正しくは、カリユのほうが遠くになっていた。

一瞬で、十メートル近く飛ばされている。痛みも、衝撃もなにもなかった。魔法？　そつとしながらカリユは立ち上がった。

「魔法ではないよ。設定だ。これでもうお前はそこから近づけない
できるならやってみせてくれ。もしできたら、抱きしめてあげる」
なにをいつているのか理解できなかった。

カリユは足を持ち上げて一步を踏み出そうとして、宙でからぶつ
て態勢をくずした。

あわててバランスをとるが間に合わない。その場で転んだ。前の
めりでなく、後ろに尻餅をついて。

「……え」

転んだまま、足をのばす。

そこにはなにもない。壁も、力もかかってないのに、足がそれ以
上すすまなかった。

まるで見えない壁があるように。というよりは、身体が先にいく
のを拒んでいるような感じだった。もう一人の自分が、勝手に身体
に命令をだしているような。

魔法でない。理屈ではなく、カリユはそのことを理解した。これ
はそんなものではない。

「それがお前という存在の限界だ。カリユ・フィート。職業・村の
子ども。LV3。装備・布の服。手製の投石紐。備考・わんぱくだ
が正義感の強い、素直な少年。父親のように立派な獵師になること
を夢見ている。隣の家のジーニアスとは生まれながらの幼なじみで、
なにかにつけて年上ぶる彼女を少々うつとうしく思っているが、大
切にも感じている。……ふふ、可愛いな。しかし、今じゃこんなの
まで見れるのか」

「な、」

「なにを。お前のステータスだよ。カリユ」

炎を背にしてゆつくりとカリユに近づきながら、ナオミは言った。
「元々、お前たちのステータスは表示されていたが。しかし、隠さ
れていたソースまで見れるというのは、凄いな。ちょっと量が膨大
すぎるが。……ああ、お前は本当に私を大切に思ってくれていたの

だな。嬉しいよ、カリユ」

頭をなでた。

カリユは動けなかった。

前に進めないのはなにかの力がかかっているからだっただ。

なら、後ろにもいけないのは？

それは間違いなく、目の前の相手が怖かったからだ。

いまさらのようにカリユは気づいていた。ナオミはさつきから、
ぼくが心で思っただけのことを口にしている……！

「そう。私にはお前の全てが見える。震えているのも。その理由も。
それが私とお前の違いだ、カリユ」

手を離して立ち上がり、彼女は言った。

「自己の存在に悩まず、ただ与えられた役割を果たす。我々の行動
に異を唱えられず、許可された場所にしか足を踏み入れることもで
きない。そういうものなんだ。だからお前はそこから進めない。今
さつき、私が小屋周辺への接近を禁じたからな」

その言葉は、ひどく冷たい声に聞こえた。意味はわからずとも、
あまりに容赦のないものであるように思えた。

哀れみの表情で見下ろしている。

それが無性にくやしくて、カリユは全身に叱咤して立ちあがった。
ナオミに掴みかかろうとする。しかし、彼の足は根がはえたよう
にびくりともその場から動かなかった。

「……怒っているな。だが、それもすぐに消える。お前達は逆らえ
ない。怒りを持続できない。そうして生を繰り返す、かわいそうな
あやつり人形なのだから」

ナオミの伸ばした手がカリユの頬をなでた。愛しさのある仕草だ
った。

向こうから近づいてきたのなら、動ける。

カリユはナオミの手に噛みついた。広がった奇妙な味わいに口を離して、そして声をうしなった。

噛みついた手のひら、その傷から青い血が流れていた。

あの小さなドラゴンが流していた血の色だった。人の血ではなく。

痛みなどまったくないという平然な顔のまま、ナオミが優しくに言った。

「お前は優しくかった。すごく優しくかった。だから、お前の記憶には触れないでいくよ」

腕が伸びる。

やめろ、と抗うことはできなかった。金縛りにあったように身体がうごかない。

そつと額に触れるあたたかな手のひらにすくわれて、カリユの意識は闇におちた。

絶望にも似た別れの台詞が聞こえる。

「……さよなら、優しいNPC」

たびだち 1

カリユは自分の部屋で目を覚ました。

夢だったのか。寝ぼけた視界で天井を見ながらそう考える。

左手をみる。

そこには包帯が巻かれている。にぎると、ずきんと痛んだ。

夢じゃない。

ゴブリン。変なしゃべりかたの魔法使い。小さなドラゴン。火事。ナオミ。そして

……自分はどうかやって家に戻ってきたのだらう。火事は？ 村は、いったいどうなったのだらう。

いろんなことを頭に思いうかべながら、カリユは部屋をでた。

でたらすぐそこも部屋になっていて、三人の姿がある。父親と母親、もう一人。母親はキッチンで朝ごはんの準備をしていて、あとの二人は暖炉前のテーブルに腰かけていた。

「おはよう」

いつものように無言の父親と、背中をむいた母親に挨拶をして、顔をあらってこようと外の井戸に向かいかけて、扉に手をかけとこるでカリユは違和感のしつぽをふんづけた。

振り返る。

「ずいぶん遅いお目覚めじゃな」

銀色の髪と褐色の肌をした見知らぬ誰かがそこにいた。

いや、知らない相手ではなかった。昨日、カリユを助けてくれたあの魔法使いにちがいなかった。

「な、なっ」

「なんでここにおるかと言われてもの。招かれたから泊まっただけ

よ」

招かれた？

父親が立ちあがり、カリユのちかくにやってきた。げんこつをおとす。

「痛っ！」

目の前に星がとんだ。

しゃがみこんで頭をおさえるカリユに、静かに怒った声がふつてきた。

「……昨日、村はずれで寝ていたお前を連れて帰ってきてくださったんだ。ちゃんとお礼をいいなさい」

「そつ、なの？」

もう一発、げんこつがおちた。

「そうなんでゴザイマスカ」

涙目になりながら見あげたカリユに、銀髪の魔法使いは涼しげな表情でこたえた。

「でかい火のそばで気持ち良さそうにしていたのを、たまたま見つけただけじゃがな」

「火……」

「そうだ。森の火事も、この人が魔法ですべてしずめてくださった。村を救ってくれたんだ」

魔法。火をつけることができるなら、反対のことだって消すことだってできる。

ゴブリンをあんなに簡単に倒した魔法使いなら、たしかにそのくらの魔法はつかえても不思議はなかった。

尊敬の表情であおぎみるカリユに、相手は照れもない態度で、

「探しものをしていたついでよ。褒められるようなことはしとらん」

「それでも、私たちの村は救われましたから。カリユのことも。本当に、ありがとうございました」

お盆を持ってテーブルにやってきた母親が、深々と頭をさげた。父親がカリユをにらむように見る。母親を手つだつてご飯を並べていたカリユは、あわてて頭をさげた。

「ありがとうございます」

すぐに頭をあげた。せきこむようにたずねる。

「あの！ 俺がいた近くに、他に誰か」

すつと魔法使いの切れ長の瞳がほそまった。

「他には誰もおらんかったが」

「……そう、ですか」

カリユの脳裏に声がよみがえった。 さよなら。

いつもより豪勢な朝食がはじまった。

食事のまえのお祈りのあいだ、カリユはじつとテーブルを見るようにしていた。

それを向かいにすわった魔法使いが、醒めた眼差しで眺めている。

「ごちそうさま」

ほとんど食べ物にてもつけず、カリユは立ちあがった。

「ちよつといってくる」

「カリユ、待ちなさい。こちらの方が、お前に聞きたいことがある
って」

母親の声がかかるまえに、カリユは扉から飛び出していった。

はあ、とため息をついた母親が、すまなそうに客人をみている。

「すみません。落ち着きがない子で」

「なに、子どもはあれくらい元気なほうがよろう」

スープを美味しそうに飲みながら、魔法使いは笑った。

「昨日も、女の子をまもうと身体をはっておったよ。よいおのこ
じゃな」

「そうですか」

嬉しそうに母親の口元がほころんだ。無言で食事が続けている父

親はなにと言わないが、内心でよろこんでいるようだった。

父は寡黙だが誇りだかく、母は穏やかでやさしい。それこそがはぐくんだ性格であることは違いなかった。それが例え、そうあるべきで定められたものであるとしても。

質素だが心のこもった食事をあじわい、魔法使いは席から立った。

「馳走じゃった。さて、少しわっぱを借りてもよいか」

「それはかまいませんけれど、あの子がどこにいったのか……」

「こちらで探すのでかまわん。見当はついておる」

横がけたフードをとりながら、こともなげにいった。

家を飛びだしたカリユは村のはずれにやってきていた。

昨日までほったて小屋がたっていたその場所。今は火事のあとが痛々しく、すべてが焼け落ちてしまっている。

そこに一步を踏み出そうとして、やはりある場所からはまるで身体が前に進まなかった。

「くそ」

どこか抜け道はないかと小屋のまわりを一周する。

そんなものはなかった。はかったように、円状に見えない壁がたちふさがっているようだった。

「くそ！」

ふりおろす。痛みも、なにかに触れた感覚もなく、こぶしは宙で止まった。

カリユは思いつく。穴をほったらどうだろう。

モグラみたいにもぐっていけば 地面を掘り起こそうと手を伸ばしかけるカリユに、冷やかな制止の声がとどいた。

「やめておけ。爪がはげる」

振り返ったそこに、フードをかぶった魔法使いが立っていた。

カリュは黙って、道具になりそうなものがないか探した。スコップをとり、帰るより、石かなにかでもいいから近くに落ちてないかと見回して、魔法使いに笑われる。

「やめておけと言うとろうが。いくら掘っても無駄じゃ。禁止フィールドは目に見えるところだけではない。上からだろうが、下からだろうが、ぬしはそこから先には進めん設定よ」

カリュは動きをとめて、たたずむ魔法使いを見た。

たったいま投げかけられた、意味のわからない言葉を思いかえし、わけがわからないことをあらためて確認して、わからないまま納得した。

低い声でたずねる。

「……あなたも、ナオミと一緒になんだ」

魔法使いは首をかしげた。

「どうかの。それはちと難しい質問かもしれん」

「せっていつて。なんですか」

とぼけるような相手の態度を無視して、カリュは質問をつづけた。

「えぬぴーして、きんして。なんで。なんでナオミがあんな」

「

青い血。

ぶるりと身体をふるわせたカリュに、魔法使いがいう。

「見たとおりよ。噛みついたときにお前が感じた、それが答えじゃな」

この人も、ぼくの心をよんでる。ナオミのように。

「そう警戒するな。少しばかりおぬしに聞きたいことがあるだけよ。かわりに、ぬしの聞きたいことにも答えてやる」

「……どうして？ 心が読めるなら、わざわざそんなこと聞かなく

たつて」

「文字だろうが数字だろうが、羅列は羅列。そこに意味をつけるのは人。わしが読めば、それはわしの答えでしかない。最適解が正解ともかぎらん。まして人の心、たずねて聞くのがもつとも誤差がない。当然、主客をあらかじめ限ったうえでの話じゃがな」

変なしやべり方のせいもあって、魔法使いの台詞の意味はほとんどカリユにはわからなかった。

ただ、この相手が自分と会話をしたいのだなということは理解できた。

「聡いわっぱじやな。ほれ、こつちこい。膝枕してやろう。好きなのじゃろ」

「なっ」

突然そんなことを言われたカリユは声をうしなう。母親に膝枕してもらうことが大好きなのは、誰にもいつてない。ジニイにだって内緒だった。

顔を真っ赤にするカリユをけらけらと笑い、魔法使いは芝生に腰をおろした。

「母御のそれには叶わんじやろうが、わしの膝もなかなかぞ。……左手の傷をみるだけよ、とって食いはせんわ」

手招きされるのに導かれてふらふらと、カリユは魔法使いのもとへ寄っていった。

やわらかそうな太股を見てためらって、覚悟をきめた。ごろんと寝転ぶ。藁のベッドとはやわらかさもあたたかさなものにもかも違う弾力。あきれたような声がふってきた。

「なんじゃ。やっぱりしてほしかったんか」

「……ちがつ」

あわてて起き上がろうとしたのを、やわらかい弾力でおさえつけられた。

「力をぬけ。ぬしのかわいい幼なじみには黙っておいてやろう」

「……！……っ！」

ばたばたと暴れて、それでも逃げ出せないのがわかって、カリユは陸にあげられた魚のように脱力した。甘い匂いがした。かぎなれた母親のものとは違う。なんだか眠たくなるような、不思議な香りだった。

持ち上げられた左手の包帯をはずされる。

「いくら低温でも、ああも強く握りしめればこれくらいにはなるか。ようもまあ、あんな無茶をしたものじゃの」

「……だって、ほかに武器が」

「褒めておる。まあ、そのあとの行動はいかんかったがな」

「……………」

魔法使いがさつと手をなでると、そこにあった傷が消えた。

言葉の通り、魔法のようだった。呪文もなかったのに。

痛みもない。さつきまで怪我をしていたということさえわからなくなっていた。

ぼかんと自分の手のひらを見上げて、カリユはそれから顔をしかめる。それを魔法使いが上からのぞきこんでいた。

「どうした？ 嬉しくないかよ」

カリユは自分の手をにぎりこんだ。

「……なんか。消えちゃうみたいで」

痛みと一緒に、昨日の出来事が。ドラゴンとの出会いも、ナオミとのお別れも、ぜんぶ嘘だったんじゃないかと思えてしまうのが、カリユには怖かった。

「忘れてしまったほうがよいこともあるう」

魔法使いの言葉はやさしかった。

「そんなことない」

カリユはこたえる。

「そんなのイヤだ。ぼくは、忘れたくなんかない」

あのドラゴンも、ナオミも。

すぐに消える。お前達は逆らえない。怒りを持続できない。そうやって生を繰り返す。

ナオミはそういつていた。だけど、ぼくは絶対にわすれない。そう決めた。

じわり、となにかが視界ににじんだ。

「やはりぬしは、よいおのこじゃ」

そつと目のうえに手のひらがかぶさる。

「すまん。勝手をした。よけいなことであつた」

カリユはだまって頭をふった。

顔におかれた手のひらはあたたかくて、母親のものとも、幼なじみのものともちがつた。ナオミのに似ていた。

ぐつところえようとしたりカリユに、やさしい声がうながした。

「泣いてしまえ。まだ泣いておらんのだらう。よいおのこはな、よう泣くものよ」

嘘だ。男は、泣いちゃいけないんだ。

そう思ったけれど、声があまりにもやさしすぎた。

名前もしらない魔法使いのひざで、カリユは声をあげて泣いた。

「……聞きたいことつて、なに」

おもいつきり泣いてから、カリユはいった。

少しはずかしかった。ぶっきらぼうな口調はその照れ隠しだ。

「うむ」

そんなカリユの気持ちなどしらぬふうに、少年の髪の毛をいじりながら魔法使いはいった。

「昨日まで、ここ的小屋に住んでおつた冒険者が、身に竜をやどし

た。それで間違いないか」

カリユはうなずいた。

「その冒険者は一月ほど前にここに現れたそうじゃの。村人と近づこうとせず、一人でここに住んでおった」

「……うん。ナオミと話すのは、ぼく　俺くらいだった。村の大人も、近づいちゃいけないって」

ジニイも、カリユがナオミに会いにいくのをすごく怒っていた。だからカリユはナオミに会いにいくとき、こっそりと会いにいった。

「ふむ。……ぬしが森で見つけたドラゴンをつれていったときのことだな。その冒険者は震えておったようじゃの」
どうだっただろう。

あのときはドラゴンの怪我のことで頭がいっぱいで、そこまではおぼえていなかった。

「他ならぬ、ぬしの記憶に聞いたことよ。間違いない。わしが聞きたいのはそこじゃ」

一拍の間をおいて、魔法使いはいった。

「その女、どうして震えていたと思う？」

「……わかんないよ、そんなの」

「わかる。いや、ぬしにしかわからん。考えてみよ」
強い口調だった。

カリユは目を閉じて昨日のことを思いかえす。

ドラゴンを見たときのナオミの表情。いつものようにぼうつとした態度で、ふらふらと近づいてきて　ああ、確かに手当てをしているあいだ、隣でじっとドラゴンを見ていた。なにかつぶやいていた。それがなんといっていたかは、わからないけれど、

「……怖がってた」
「なにを」

「ドラゴン」

いや、そうじゃない。自分のつぶやきをカリユは否定した。

「……たくさん。多分、いっぱいなんだと思う」

村とかかわるうとしないで一人で村はずれにいたのも、ずっと小屋のなかにこもってたのも。

ドラゴンが理由なんじゃない。あのドラゴンは多分、その一つだ。

魔法使いが深い息をはいた。

「なるほどの。だからこそ、自分がそれになることを望みおったか。無茶なことをしよるわ」

笑っているような、怒っているような声だった。

カリユののをくすぐり、それをいやがって身をよじった拍子に魔法使いが立ち上がる。

「ぬしの考えで恐らく間違つとらん。わっぱ、感謝するぞ。聞いたことはそれだけじゃ」

どこかいこうとする背中に、あわててカリユは声をかけた。

「まって！ まだ、聞きたいことがあるのに！」

「……ああ、そうだったの。すまん、ありや嘘よ」

あっさりと魔法使いはいった。

「嘘、って」

あまりに堂々と言われてしまい、カリユは二の句がつけない。

フードの縁からのぞく涼しげな目元を草原の風にゆらして、魔法使いは笑った。

「というのは冗談じゃが。だが、聞かんほうがいい。聞いたら、きつとぬしは帰ってこれんくなる」

「帰る？」

「向かうために、聞くのであろう」

ぎよっとしかけて、すぐに気をとりなおした。

自分の考えを読まれているなら、隠したってしょうがない。それで怯える理由もない。

「……ナオミを、探したいんだ」

「探してどうする。違う、といわれたのじゃろう」

「だから。なにがちがうのか、教えてもらって。考えて」

「聞いたところで、事実は変わらない」

魔法使いはいった。

「諦めよ。ぬしはむしろとは違う。このまま村で大きくなれ。命と、両親と、幼なじみを大事にせい。そのほうが幸せよ」

「イヤだ！」

カリユはいった。

ただこの態度だった。それに続いた行動がちがった。

カリユは地面に目をやって、手ごろな大きさの石をさがした。それをひろって、その鋭利なかどで左の手のひらを切り裂いた。

魔法使いが小さく目をみひらいた。

激痛がはしった。涙がにじむ。手のひらから鮮血が流れた。二回、三回、と傷のうえからさらに切り刻んで、カリユは涙目のまま、真っ赤に染まった手のひらを魔法使いにつきつけた。

「絶対に、わすれない。忘れてなんかやるもんか！」

二人はしばらくにらみあった。

上から見下ろす静かな眼差しと、下からにらみあげる涙のたまった視線がからみあい、先に根負けしたのは魔法使いのほうだった。

「見上げた頑固者じゃ」

呆れたようにいい、空をみあげる。

思案するようにしばらくそのままの姿勢で、それからカリユに顔をむけた。

「……帰れんぞ。ぬしは今までのぜんぶを捨てることになる。村も、やさしい両親も、かわいい幼なじみも。ほんにそれでいいんじゃない」

ずきんずきんと、まるで手のひらに心臓があるみたいに痛みが脈をうつっている。

その痛みを丸ごとにぎりしめて、カリユは大きくうなずいた。

たびだち 2

いなくなったナオミを探すために村をでる。

そう決意して、カリユの頭にうかんだのは両親とジニイだった。いきなり村を出るなんていつて、反対されないはずがない。

母親は心配するにきまつてるし、父親はなにもいわずにげんこつを落とすだろう。どうやって説得すればいいのか悩みに悩んだカリユだったが、魔法使いはあっさりと告げた。

「問題なかる。わしが一緒だからな」

それは、村の恩人の言葉があれば話くらいきいてくれるかもしれない。

どうしてそこまで自信があるのか不思議に思ったカリユをみて、

魔法使いは口のはしをもちあげて、

「そついうものよ」

意味ありげに、それ以上なにもいわなかった。

相手のいった言葉の意味をすぐにカリユは実感した。

村にかえり、両親に魔法使いについていきたいことを告げると、

二人は驚き困惑した様子だったが、反対はしなかった。父親はしかめつらで、母親は辛そうに、それぞれ深い嘆息をはいただけだった。

「そうか」

怒鳴りつけられるとばかり思っていたカリユは、肩すかしをくらった気分で父親をみあげた。

「……いいの？」

恐る恐るたずねると、父親はためいきのような答えをかえした。

「仕方ないだろう」

その答えに、カリユは奇妙な違和感をおぼえた。

仕方ない。

それは、自分がそう決めたから？　それとも、村の恩人が一緒だから？

カリユは隣にたつ魔法使いをみた。

会話をききながら、それがさも当然だという風にその人物は立っている。

「いたい、なにが当然なの？

ぞわりと鳥肌がたった。

カリユの視線にきづいた魔法使いが少年をみた。心が読めているはずなのに、その目にはなんの感情もうかんでいない。ただ見おろしていた。

なにかおかしい。なにかが変だ。

その違和感の正体がなんなのか、カリユが考えにいたらないうちにも、話はとんとん拍子ですすんでいた。

出発は明日。準備や、村のみんなへ挨拶をしてまわって、旅立ちの日をむかえる。

自分たちが大人連中に話してくるから、まずは身の回りの準備をしてきなさい。それから、ジニイにはちゃんと話しておくのよ。両親の言葉をほとんどうわのそらでききながら、カリユはずっと考えていた。

変だ。変だ。ぜったいに変だ。

「だから言っただじやろうが」

両親がいなくなつて二人きりで、魔法使いがいった。

「わっば。ぬしはもう戻れん。なんの疑問も恐れもいдаかず、幸せに生きることばできん。これから、ぬしは全て失う。全てを疑う。」

全てが崩れる。ぬしがこの村から外にでるということは、そういうことじゃ」

ふと、カリユの足元に目をやって眉をもちあげた。

「おい。ぬしは一体、なんの上に立っておるかよ」

え、と視線をおとしかけたカリユは、ぐにやりと足場がくずれるのに悲鳴をあげかけた。

いつのまにか、下が泥みたいになっている。木が、土が、どろどろのぐずぐずになって身体バランスがとれない。椅子をつかもうと、のびした手が空をきった。

転んだ。痛みをめをとじて、ひらいたときにはすべて元にもどっていた。

床も、椅子もいつものとおりにそこにあった。

カリユはすわりこんだまま、魔法使いをみあげる。

相手はさっきから一步も動いていない。魔法なら動く必要はない。呪文だつてつかわずに火傷をなおしてみせた。けど、これは、魔法じゃない。

カリユの全身にびつしりと汗がういていた。そのつめたい感触が、カリユに正しい認識をもたらした。

もしかして、おかしくなったのはぼくなんじゃないか？

「聡いのう」

魔法使いが微笑んだ。

「正常か異常かなぞはこの際どうでもよい。重要なのは、おぬしが変わったということじゃ。怖かるう。ぬしが今まであたりまえと思っていたことが、これからは全て信じられなくなる。恐ろしゅうてたまらんくなる。今なら、まだ戻れるがの」

そうしろとすすめている口調だった。

むっとたちあがり、カリユは魔法使いになにもこたえずに自分の部屋へむかった。

「頑固じゃな」

楽しそうに、カリユの後ろをついてきた魔法使いがベッドに腰をかける。

今さらおどされても、だまされるもんか。それがおどしなどではないことにカリユはほとんど気づいていたが、あえてそう思い込むことにして旅の準備をはじめた。

準備といっても用意できるものは多くない。下着と、替えの服。

あとは投石につかうために、毎日拾いあつめておいたつぶて。それから、ほんの少しだけの硬貨。

村では貨幣を使う機会なんてほとんどなかったから、これはカリユが戦利品や拾いものを村の道具屋に買い取ってもらってこつこつあつめたものだった。

用意したそれを大きな布袋につめこんで、もう少し中身に余裕があった。他になにか詰めておくものはないかなと首をめぐらせていると、ベッドから声がかかる。

「無理に探さんでよい。忘れるものは忘れる。入らんものは入らん。満杯にするよりは、半分くらいで丁度ぞ。残りには別のををつめていけ」

しなだれるように横たわって、魔法使いは妖艶な笑みをうかべていた。それよりもな、と続ける。

「外を見てみい。客じゃ」

部屋に一つだけついた窓に顔をむけたカリユはげ、と顔をひきつらせた。

そこにはおもいつきり眉をつりあげて、顔を真っ赤にしたジニイ

が窓の向こうからカリユをにらんでいた。

カリユはあわてて家の外にでた。ついてきてくれると思った魔法使いは同行してくれなかった。

「こればかりはぬしの仕事であろう」
意地の悪い笑みをうかべるその姿は、あきらかに楽しんでいる様子にしかみえなかった。

玄関の扉をあけたそこに、仁王立ちのジニイが腰にてをあてて立っている。ぎよつと身をひきかけて、カリユはとりあえずなにか言おうと口をひらきかけた。

「バカ！」

それよりはやくジニイの怒声がとんだ。

「バカ！ バカリユ！」

呼吸を忘れてるんじゃないかと思えるくらいの勢いでつづく。

「ごめ」

「バカ！ バカ！ おたんこなす！」

ああ、これはだめだ。

弁解をあきらめて、カリユは口をつぐんだ。

こうなれば最後、ジニイの気がすむまで黙っているしかない。背を伸ばして目をとじて、男らしくすべてを受け入れようと心にきめるが、

「チビ！」

その一言でかっとな頭に血がのぼった。

「チビじゃない！」

「チビじゃない！ あたしより小さいくせに！」

「ほとんど一緒じゃないか！ 髪の毛のせいだろ！」

「そんなわけないでしょ、バカリユ！」

噛みつけるほど近くで言い争って、ふとジニイの目に涙がにじんだ。

そのままわんわんと泣き出す。

カリユは途方にくれた。

あわてて頭をさげてあやまって、なだめすかして。ジニイが泣きやむまでにものすごい時間がかかった。

「……ナオミが、いなくなっただ」

裏庭の原っぱに場所をうつして、カリユは隣にすわるジニイにいった。

さつきまで泣きじゃくっていたジニイは、まだ鼻をならしている。目が真っ赤だった。

お昼ちかくの太陽がぼかぼかとしていて、それがジニイの涙をかわかしてくれないかなあと思いながら、カリユは続けた。

「ぼくのせいなんだ。だから、探しにいかないよ」

「あの、女の人と？」

「……うん」

風がふいて、草がゆれた。

二人のいる奥には村をかこむ柵があつて、その向こうの林がそのまま森につながっている。そのずっと先にある燃え落ちた声を見るようにしているカリユをちらりと横目でうかがって、ジニイはぎゅつと唇をかんだ。

「……あの人、きらい」

「あの人って？」

ジニイはこたえなかった。

「ナオミもきらい。だからあんなに、あそこには行っちゃいけない

っていつておいたのに」
また、じわりと涙がうかんだ。

わたわたとして、カリユはなにもいえない。頭の中で、銀髪の魔法使いにためいきをつかれたような気がした。

ジニイがかかえた膝に顔をうずめた。

なにもいわない。嗚咽がきこえたから、涙をこらえているのかもしれなかった。

カリユは黙って、待った。

「冒険者なんて。大っきらい。たまに村にくるけど、あの人たち変だもの。偉そうで、ずうずうしくて、礼儀しらずで」

「……うん」

「意味わかんない。なんでカリユが、そんなのにならないといけないの。ナオミなんて、関係ないのに。勝手にすみついた冒険者が、勝手にいなくなっただけなのに」

「うん」

「うんじゃないわよ、ばかあ」

ジニイが顔をあげた。

生まれたときからの彼の幼なじみは、やっぱり泣いていた。涙をぼろぼろとながして、目と鼻があかくて、ほつれた髪がほつぺたにはりついていて。ひどい顔だった。

ジニイの泣き顔がカリユは苦手だった。そんな顔をさせたくなくなかった。

同時に、すこし嬉しい気もしていた。

ジニイはおかしくない。両親のように変な物分りのよさがなくて、逆にかリユをほっとさせていた。

「大丈夫。俺、もどってくるよ」

魔法使いからいわれた言葉を無視して、カリユはいった。

「絶対もどってくるから。約束する！」

右手をさしだす。

いやがるジニイの右手を強引につかまえて、小指どうしをからめて上下にふった。約束をかわすときに行う誓いだった。

「うっそついたらゴブリンからひやくたったき。ゆーびきった。

ほら、ねっ」

「……知らない」

ジニイはそっぽをむいた。

すこしだけ機嫌がなおってる。ほっとして、カリユはえいやっとジニイの膝のうえにねころんだ。

「カリユ、ちよっと、なににして」

「いいじゃん。ちよっとだけ」

あわてるジニイ。気にせず、カリユは目をとじた。

はじめてしてもらう幼なじみの膝枕はきもちよかった。

母親とも、あの魔法使いともちがう。

当たり前だ。ジニイは、ジニイなんだから。

「……もどつてくるよ」

ぽたりと、カリユのほっぺたにしずくがおちた。

「約束だからね」

上からのぞきこんだ彼の幼なじみが、泣いていた。

「ぜったい、ぜったいだからね。待ってるんだからね」

「うん。ぜったい」

目をあけたカリユがいうと、それでようやくジニイはちよっとだけ笑った。

「……カリユ。膝枕が好きなの？」

答えに迷ったけれど、カリユは正直にいうことにきめた。

「うん。好き」

「……やっぱり子どもじゃない」

「そんなことないやい」

カリユは頭を横にして、幼なじみのおなかに顔をおしあてた。

「ちよつと。こら」

狼狽するジニイにかまわず、臭いをかぐ。お日さまと土の香りがした。

忘れまいと思った。

この香りを、絶対にわすれない。そうすればまたこの村に戻ってこれるはずだからカリユはそう信じた。

「もう。ほんとに、子どもなんだから」

呆れたように笑って、ふと気になったようにジニイがたずねた。

「お母さんにも、してもらったりするの？」

「……たまに。ちょこつとだけ」

「ね。お母さんのと、あたしの。どっちが気持ちいい？」
「どうだろう。」

かたさ、やわらかさ。弾力。あつたかさ。色々な観点から考えて、

「よくわかんない」

「なによそれ」

不満そうにジニイが口をとがらせた。

「だって。うーん、ジニイのはどっちかっていうと、お姉さん寄りかなあ」

ぴくりと、ジニイの身体が震えた。

「お姉さん？」

自分の失言にきづかず、カリユは目を閉じたままつづける。

「うん。母さんのとはちよつと違う感じ。なんだろ、弾力かなあ。

別にどっちが」

なぐられた。

不意をつかれて、そのうえおもいつきり全力でなぐられて、カリユは意識をうしないかける。

「な、なにすんだよ！」

飛び上がって、そこで動きをとめた。

カリユの目の前に、剣呑な雰囲気の幼なじみがこぶしをかためていた。

「……お姉さんが、どうしたって？」

なぜかはわからなくても、なにか自分がドラゴンを怒らせるようなことをしてしまったことには気づいて、あわててカリユはいった。「いや、えっと、ジニイもはやくお姉さんみたいに　じゃなくて、お姉さんになってきたなあって」

「誰」

「え」

「ナオミにしてもらったの。今まで一人で村はずれにいて、そんなことしてもらってたんだ」

なにかとんでもない誤解が生まれようとしている。

カリユはぶるぶると首をふった。

「違うよ！　相手はあの魔法使いのお姉さんで、してもらったのはさっき一回だけで」

それ以上は続かなかった。

ゴブリンだつて一撃でたおせそうな拳をうけて、カリユはその場で意識をうしなった。

「バカリユ！　だれが、あんたなんか待ってるもんですか！」

ずかずかと足音をふみならしながら、幼なじみは去っていった。

「たわけじゃなあ」

ベッドのうえで目をして一部始終を見ていた魔法使いは、おか

しそつに腹をかかえていた。

たびだち 3

広っぱで気絶していたところを起こされたカリユは、村長や村の人たちに挨拶をしてまわった。

あわただしく一日が終わって、翌日。

「それじゃ、いつてきます」

家の扉の前で、カリユはうしろを振り返った。父親と母親がそれぞれの表情でたっている。

無言で父親がうなずき、母親が口をひらいた。

「……怪我に気をつけるのよ」

「うん」

母親は顔をくしゃりとゆがめると、カリユの隣にたつ魔法使いをみた。

「少ないですけど、どうかこれを」

布袋からじやりと硬貨の音がなる。魔法使いは首をふった。

「可愛いせがれを預かるだけでも大悪というに、そんなものまで受け取れるか」

そういつて、逆に母親の手に何かをのせた。

「それを手にして強く念じるがよい。わっぱが健やかなら、石がほのかに輝く。姿が見えるわけでも、声が聞こえるわけでもないが。それでも、心を休ませる足しにはなるじゃろう」

掘り出した水晶のような石を受け取って、母親は泣き笑いの表情で頭をさげた。

「ありがとうございます」

魔法使いが父親をみた。父親は黙ったまま頭をさげただけだった。小さくうなずいた魔法使いがカリユをみおろした。

「いくかの」

カリユはこくりとうなずく。

魔法使いにつづいて歩きながら、カリユは何度も家の前にたつ両親を振り返った。

生まれ育った家と両親が小さくなる。

ふいに不安になって、カリユの足が止まりそうになる。

みあげると、魔法使いは振り返ることなく歩みをつづけていた。置いていかれないよう、カリユは小走りになって彼女の後をおいかけた。

住みなれた村を歩いているうちに、感傷がわいてくる。

なにを弱気になってるんだ、また戻ってくるんだ。そう約束したじゃないか。

自分を叱咤して、ふときづいた。

村の出口に誰かがいた。柵に背をあずけるようにして下をうつむいているのは、カリユと同じ年頃の少女だった。

「ジニイ」

呼びかけると、ジニイは怒ったような表情で顔をあげた。

目元が腫れている。一晩中泣き明かしたとわかるあどだった。

「あたしもいく」

ジニイはいった。彼女の足元には大きな背負い袋があった。

「なにいつてんだよ。そんなのダメにきまつてるだろ」

カリユはいった。

「なんでカリユはいいのに、あたしはダメなのよ」

「それは、だって」

カリユは魔法使いをみた。フードをかぶった魔法使いは、そ知らぬ顔で遠くをながめている。

「……危ないし」

「そんなの、カリユだっておなじでしょ」

「俺はいいの。でもジニイはダメだ」

「なにそれ。意味わかんないよ」

ジニイは魔法使いの前にすすみでて、下からのぞきこむようにしていった。

「お母さんからは、ちゃんと許可をもらってます。一緒に連れていってください。おねがいします」

ぺこりと頭をさげる。魔法使いがちらりとジニイの荷物に目をやった。

「隣町までの使いか」

ジニイは目をまるくしておどろいた。

「……うちのお店の仕入れの連絡を、手紙で。ほんとに村に郵便屋さんがあるんですけど、今月はおそいから。それで」

「ふむ。……帰りは送ってやれんが、父親が向こうにいるのなら問題ないか。まあいいじゃろ」

え、とカリユは魔法使いの言葉をうたがった。

「しかし、黙って連れていっては人さらいと思われかねん。村長らに話をしてくるから、ぬしらはちと待つておれ」

「ちよつとまってよ！ そんな、勝手に」

「ありがとうつ」

カリユの文句はジニイの声にかきけされた。ちらりと振り返った魔法使いが意地悪くいう。

「嫌なら、ぬしが説得せい。わしが戻ってくるまでにな」
そのまま歩いていく。

言われるまでもないことだ。カリユは幼なじみをにらみつけた。
「ジニイ！ なにかんがえてんだよっ」

すました顔でジニイがこたえる。

「だから、お使いよ」

「そんなの大人にまかせておけばいいだろ。ジニイがいく必要なんでないじゃないか！」

「あら、あたしはカリユとちがって、村をでるのははじめてじゃないわ。隣町にいったことだってあるもん」

「そのときはおじさんと一緒だったんじゃないかつ」

「だから、あの魔法使いさんについてくの。町にはお父さんがいるから、帰るのも一人じゃないし。なにも問題ないわ」

「なにが問題ないだ。おおありだ　わめきたくなるのをぐっとおさえて、カリユは声をおちつかせる。」

「……わかった。じゃあ、その手紙あずかるから。俺からおじさんに渡せばいいでしょ」

「ダメよ」

「なんでさ！」

「だって、カリユ、うちの商品のことなにもわからないじゃない。」

「一緒に店番してても抜け出してすぐどこか遊びにいつちゃうし」

ジニイの家は村で道具屋をひらいている。一緒に店番をしようとしてジニイから誘われるたびに、途中でつまらなくなつてカリユがぬけだしていたのは事実だった。

そのことと、店にならぶ品目について無知であることは、手紙を渡せばいいだけの今回の一件とはまるで関係ない。それにカリユが気づけなかったのは、ぬけだして遊びにいていた先が村はずれのナオミの家だったからだ。

ジニイはナオミのことになるとすぐ怒りだす。カリユがその話題に慎重になるのをみこしたうでジニイはそういつているのだった。

案の定、言葉をつまらせるカリユに、ジニイは駄目押しと近寄つてその目をのぞきこんだ。

「ね、いいでしょ。町までだから。」

「お願い、カリユ」

そんなふうには下手にでていわれると、カリユは弱い。眉間をしかめてうんうん唸って、観念したようにいった。

「……町までって約束する？」

「するする」

輝くような笑みでジニイはうなずいた。

「絶対だぞ」

「うん、ぜったい」

「……指きり。ゴブリン百、二百たたきだからな」
「ん」

気軽な仕草でジニイは右手をさしだした。歌の調子にあわせながらからめた小指を上下にふって、約束をかわす。

にこにこ満面の笑みをうかべるジニイに、カリユは大きくため息をつく。

自分が負けたのだとはつきりとわかったからだった。

魔法使いはすぐに帰ってきた。

カリユとジニイの顔を見て、どういふ話になったのかそれだけで察したらしかった。なにも聞かずに自分の荷をもって、二人にいった。

「さて、いくか」

しぶしぶとカリユが、嬉しそうにジニイがうなずく。

町の出入り口の門をぬけたところで、ふと気づいたように魔法使いが足をとめた。

「そつえば、まだ名前もいっとらんかったな」

自分を見あげる幼い二対の眼差しに、にこりと笑む。

「わしの名は　ディーネじゃ。よろしくの」

フードの奥からでも人を魅了してやまない表情だった。

おもわずみとれてしまうカリユを見て、ジニイがむっとして肘鉄をくらす。

「ぐえ。……カリユ。フィート、です」

「ジーニアス・ラプランテです。よろしく願います」

「うむ。ではいこう。町までは二日ほどか。野営の場所まで、明るいうちについておきたいのう」

「はい」

声をはもらせて答えて、一歩。

おぼえのある奇妙な感覚にカリユは全身をふるわせた。

昨日、家で感じたのとおなじ、そこがぬけるような気色のわるい感覚。足元からつたわって頭と手のひらのさきまでふるわせるその震えをのみこもうと、ごくりと唾をのんだ。

「？　どうかしたの、カリユ」

少し先をいくジーニがふりかえってたずねる。

彼女の顔色は普通だった。

ジーニは感じないんだ。この気持ちわるいのは、ぼくだけ？

「……ううん。なんでもない」

ジーニの向こうで、銀髪の魔法使いはやはり立ち止まらず、後ろをふりかえることもしない。

負けるもんかと歯を食いしばって、カリユはさらに一歩をふみだした。

カリユにはディーネに聞きたいことがたくさんあった。

ナオミのこと、ドラゴンのこと。「せつてい」「やら、「えぬぴーしー」という言葉について。けれど、そばにジーニがいるせいで全くそのことを質問できなかった。

気にしないでたずねればいいのかもしい。しかし、それは駄目だと誰かがカリユの頭のなかでささやいていた。ジニイには、このことをきかせちゃいけない。

だから、ジニイにはついて来てほしくなかった。

説得できなかった、というより向こうに説得させられてしまったのはカリユだったから、今さら文句もいえない。ただ、やっぱりそのことをおもいだすと、カリユはすこしずつ不機嫌になってしまう。そんなふうには不満に思いなが歩くカリユの前で、ジニイとディーネは二人でおしゃべりしながら歩いている。

とても仲がよさそうだった。

それがまた、カリユにはおもしろくない。いったい自分がどちらの笑顔を見てそう思っているのかは、よくわからない。ただなんとなく、つまらなかった。

ちらりとディーネがカリユをみた。からかうような視線。

読まれた。

かつと気恥ずかしさが頭にのぼり、カリユはあわてて視線をはずした。

心を読むなんて反則だ。卑怯だ。そんなことを思いながら、それさえも読まれてしまっているのだと思つてなにも考えないようにする。

森の風景が視界にはいった。

たくさんの人が通るたびに自然とつくられていった街道。ララパタの村と隣町を結ぶ重要な道だが、決して整備されているとはいいいがたい。もともとの人通りが多くないから仕方がなかった。

町側になれば、ほんの少しだけ舗装されているが、町を出てごくわずかなあいだけ。それでも一応、馬車がおれるくらいの間隔は確保されている。それも嵐などがくれば、横にたおれた木なんか

でふさがれてしまうこともよくあった。

このあたりの土地は草原か、森か。穀物や家畜を育てるのに草原は必要で、木の実や野生の動物を捕まえるのに森は有益だった。

森のそばに村をかまえるのは当然だが、森にはモンスターがやってくるから、当然、危険もある。

街道を歩いていて、のらモンスターとであうことは決してすくない。一昨日のカリュとジニイのように、木の実拾いにでて遭遇することも。

それでも街道をつかうのは、森を迂回すれば町まで四日以上かかってしまうからだ。森のなかをいくというのは問題外。

だから、街道をいくときはモンスターにでくわしてもいいように、護衛をやとったり、集団をつくって向かうのが普通だった。

そんな時、護衛に雇われるのは冒険者とよばれる人たちだ。彼らはこの世界にたくさんいて、そういう依頼を受け持つことを仕事にしている。

ナオミもその一人だった。ディーネも。

文字通り冒険をして生きる彼らは、とても強い。魔法を使える人達も多いし、剣や斧、そういう武器の扱いにもたけている。依頼によつては、たくさんのモンスターや凶暴な相手と戦うこともあるからだった。

けれどララパタ村はとても田舎だから、彼らがくることはほとんどなかった。

それに、冒険者はいいい人ばかりでもない。

昨日、ジニイがカリュにいったように、彼らのなかには振る舞いに問題がある者も多かった。たいした依頼でもないのに大金をまきあげたり、途中で依頼をうちきつたり、約束をやぶったりしたりする。

それでいてまるですまなそうにしなかったりするから、村でも冒険者を嫌う大人は決してすくなくなかった。

村のはずれに住みついたナオミがさけられていたのは、そうした冒険者に対する偏見があつたのも要因だ。それだけでもなかったが。

……ナオミは今ごろ、なにをしているだろう。どこにいるのだろうか。

そういえば、ディーネはナオミを探すようなことをいつていたけれど、なにかあてがあるのか。だいたい、まず隣町にいつて、それからどこにいくんだろう。

自分がまったくなにも、これからのことを相手にきけていないことをいまさらのように思い出して、でも近くにジニイがいてはナオミやドラゴンのことを伏せるしかない。

それらを伏せてききだすなんて、どうやったってそんなことはできそうにないので、カリユはいらいらと前から流れてくる楽しそうなおしゃべりを聞きながら歩くしかなかった。

二人のうしろを歩きながら、カリユの不機嫌はましていく。

たびだち 4

「このあたりでよかるう」

ディーネがそう二人に声をかけたのは、まだ森に十分な明るさがある時間だった。

「今夜の宿はここじゃな」

街道の横にある大きな木には根元にぽっかりと穴があき、雨よけをするのによい場所だった。ここを訪れた人がここで暖をとった証拠が焚き火のあとに残っている。

「もう少し先まで歩けるよ」

カリユの言葉に、褐色の魔術師は首を振った。

「森は暗くなり始めてからが早い。ぬしも知っておろう」

「そうだけど。でも」

はやくナオミを追いかけないと 言いかけたところに、ぺしんとジニイに頭をたたかれる。

「バカリユ、わがまま言わないの」

むすつとしてカリユは押し黙った。

「はやる気持ちはわかるが、焦りは禁物よ。旅は長い。走っていてはすぐにバテてしまうぞ？」

覗きこんだ眼差しがカリユを見た。カリユは顔をふせた。

魔術師がくすりと笑う。その声が耳にとどいて、頭がかつとなった。また笑われた。

「さて、では仕事を分担するかの。向ここの小川から水を汲んでくる者と、近くで薪をあつめる者。小川近くには魔物がいるかもしれないから、ぬしら二人で薪を」

「ぼく一人でもいい」

うつむいたまま、カリユはいった。

「こら、カリユ。あんたさっきから」

頭を小突こうとする幼なじみの手をふりはらう。

「ジニイが一緒のほうがよっぽど危ないじゃないか。また腰をぬかされたりしたら迷惑なんだよ」

「なあんですってえ」

怒り顔のジニイがつかみかかってくるのをひらりとかわして、駆けだした。

「あ、こら！ カリユっ、もう！」

少年を追いかけようとしたジニイの肩をつかんで、ディーネがひきとめる。

「好きにさせよ」

「でも、カリユ一人じゃあ」

やんわりと首を振った。

「あのわっぱは無鉄砲じゃが、考えなしではない。心配なかるう」
「でも」

「わしと一緒にいたほうがぬしは安全、そう思っただけのことじゃ。その気概を受け取ってやれ」

ジニイが顔をしかめた。

「……勝手なんだから」

「男などそういうもんじゃ。諦めよ」

ジニイはまばたきする。男、という言葉がうまく幼なじみにむすびつかなかった。彼女にとってカリユは弟のような存在だった。

「まあ、それだけでもなかるうがな。おのこなら、一人になりたいときもあるう。そんなときに甘やかすとな、ろくな男に育たんぬしも相手を手元に縛るだけでなく、放流させるくらいの気構えを覚えたほうが後々やりやすいぞ？ まあ、しっかりと手綱は握つかんとだが」

きょとんとして見上げる少女に妖艶な笑みを残し、ディーネは小

川へと向かっていった。

よくわからない。頭をひねって考えながら、ジニイはその後をおった。

カリユは二人からはなれて、ひとりで薪をひろいあつめはじめた。子どもたちからやらされていた薪集めだから手馴れている。生木をのぞき、燃やしはじめにつかう軽めの枯れ木と、火が安定してからつかう密度のある木を、それぞれ手ごろな大きさでみつくるった。

ふと後ろをふりかえる。誰もいない。

「ちえ」

カリユは口をとがらせた。ジニイの馬鹿、ほんとにこないんだもんな。

相手が追いかけてくることを待っていた自分がすごく子どもっぽく思えてきて、カリユは頭をふってそれを追い出した。

もくもくと薪をひろう。

頭ではナオミのことを考えていた。

ナオミ。それからドラゴン。青い血。ナオミの笑い声。いった言葉。NPC。セッテイ。

「　　　　　」

頭のなかに次から次へとつかんできて、もやもやしてとれない。特にナオミから聞かされた言葉がしつこく頭にこびりついていた。哀れむように、ナオミはいった。

そうやって生を繰り返す、憐れなあやつり人形なのだから

その言葉は、なんだかとても不吉だった。どこまでも上から見下

ろされた台詞。いいかえしたいのに、いいかえせない。そんなことをしてしまつたら、もつと恐ろしいことになってしまいそう。そんな予感があつた。

「なんなんだよ、もう」

いきなり小屋に近づけなくなったり、地面がどろどろになったり。村をでるときにすごく嫌な気分になったのも、多分そのことに関係があるんだ。そうカリユは確信していた。

ナオミはそのことについて知っている。そして、あの魔法使いもそれを早く聞きたかつたのに、ジニイが側にいるからそうすることもできない。ジニイをまきこんじゃいけないと、カリユはやはり確信していた。

理由はない。よくわからない。ただの勘みたいなものだが、絶対にそうだとカリユの全身がそう告げていた。

「それだつていうのに。バカジニイ」

「なによ、バカリユ」

ぎよつと後ろをふりむくと、腰にてをあてた幼なじみが立っている。

カリユはびつくりした表情をそむけて、薪ひろいをつづけた。

「無視しないでよ」
もくもく。

「無視しないでつたら」
もくもく。

「無視しないでつていつてるでふあいあ」
「ギャー！」

火の玉を背中につけて、カリユはとびあがって悲鳴をあげた。

「ば、ば、馬鹿じゃないのっ？ 人にむかって魔法うつなんて」
「無視するのがいけないんでふあいあ」
「わー！」

背中をそらしてひよろひよろした火の玉をよける。

「わかった！ わかったからやめろよ、火傷しちゃうだろ！」
「ふんだ。あたしの魔法なんか、どうせ服がこげついちゃうくらいだもん」

言いながら、そこでジニイが半眼になった。

「ただし。にぎりしめたりしなければ、ね」

ずいとなづいた幼なじみがカリユの手をとった。

「な、なにさ」

「……傷。ないね」

「なんの傷だよ」

「どうして嘘つくのよ。……あたしの魔法、にぎったままゴブリンにぶつけてたって。さっき、ディーネさんから聞いた」

げ、とカリユは顔をしかめた。

「ほんと、馬鹿なんだから。ディーネさんもいつてたよ、あやつはあほうだって。あほうカリユ」

「うるさいなあ」

むっとしてカリユは手を振り払おうとするが、ジニイはしっかりとかなではなさなかった。

「なんだよ。はなせよ。痛いって いや、ほんとに痛い！ つめ

！ つめが立ってる！」

「あほバカリユ。あんまり心配させないで」

声が涙ぐんでいた。いやな気配に、カリユはあわてて明るい口調でいった。

「いや、だいじょうぶだよ。ほら、傷だってないし。お姉ちゃんになおしてもらったから」

「……ふーん」

一転、ジニイの声がひややかになる。ぽいつとカリユの手が自由になった。

「なんだよ」

「なんでもないわよ」

わけがわからない。

カリユは薪あつめにもどった。そのとなりにジニイがかがみこむ。
「水汲みはいいのかよ」

「もう終わったわよ。カリユが遅いから様子、みにきてあげたんでしょ」

「そんなの、誰もたのんでないし」

「さびしかつたくせに。あまえんぼ」

腹がたったカリユはもう口をきかないつもりで、そつばを向いた。

カリユのあつめた薪をみたジニイが声をあげた。

「あー。生木がはいっちゃってるじゃない。けむりでちゃうから、乾いてるのになさいっていわれてるでしょ」

「うるさいなあ。いいだろ、ちよつとくらい」

「よくない。そんなだからいつまでたっても」

いいかけて、ジニイは首をふった。

「……カリユ」

「なに」

「ありがと」

カリユはジニイを見た。いつになくしおらしい表情に、びっくりする。

「こないだのこと。ちゃんとお礼いってないから。ごめん。それから、ありがと」

「……いいよ、べつに。なんだよ急に。きもちわるいな」

「素直じゃないなあ。ほめてあげたんだから、嬉しいがりなさいよね」

「当たり前のことやっただけだろ」

「あたしを助けるのは、当たり前？」

「そーだよ」

「そっかあ。当たり前かあ」

カリユはジニイの様子を横目でうかがった。にこにこと、いつのまにか機嫌がなおっている。なにが気に入ったのかまるでわからない。謎だった。

「ね。ディーネさんって、すごい魔法使いなのよね」

「うん」

「目の前で見た？」

「見た。すごかった」

いまでも思い出せば鳥肌がたつ。ゴブリンの身体を燃やしつくしたあの炎。カリユは気をうしなっていたが、あの晩、村まわりの森火事を消したのもディーネだといっていた。火だけじゃなく、水とか氷とかの魔法も使えるのだろう。

ふと疑問におもって、カリユは自分の手のなかの薪をみつめた。

「……あんなにすごい魔法がつかえるのに、焚き火とかするんだな」
「どういうこと？」

「だって、魔法とかで炎とかだせるのにさ。いちいちこんなの使う必要とかなさそうかなって」

「うーん。でも、ずっと長いあいだ魔法を使うと疲れちゃうからじゃない？」

「そういうものなのかな」

魔法を使えないカリユにはまるでわからない。

「もちろん、あたしなんかより全然たくさん使えるんだとおもっけ

ど、一晚中って考えたら、大変でしょ」

そういえば、ジニイはだいたい一日に十回くらいで疲れてしまう
といていた。その大事な二回をさっき、あんなことに使うなよな
とカリユはおもったが、いったらまたケンカになりそうなので黙っ
ていた。

「でも、そつかあ。そんなにすごい魔法使いの人なら、なにか習っ
てみたいな」

「なにかって。魔法？」

「ほら、回復魔法とか使える人が村にいたら、やっぱり便利じゃな
い？　そういうの使えたら、あたしもカリユについていつて」

「なに、いつてるんだよ」

とたんにけわしい表情で、カリユはジニイをみた。

「ジニイがついてくるのは町までだろ。約束したじゃんか」

「……そうだけど」
「遊びじゃないんだ。そんな気持ちで、おばさんを心配させるなよ
な」

それを聞いたジニイが眉を吊り上げた。

「そんなの、カリユがいわないでよ！　ばか！」

ばしん、と薪をカリユになげつけて、ジニイは去っていく。どす
どすとふみしめる足音がものすごくおこっていた。

幼なじみをみおくつて、ふと手元に目をおとしたカリユは顔をし
かめた。せつかく持ち運びしやすいようにあつめた薪が、ジニイの
投げつけた薪のせいで崩れてしまっている。

「なんだよ。邪魔しにきただけじゃんか」

ぶつぶつと文句をいいながら、カリユは薪あつめを再開した。

ひろいあつめた薪をもって大木の根元に帰り、火をおこす。

とはいっても、火そのものはディーネがひとことつぶやくだけで生まれたから、いつものように種火から慎重にそだてる必要はなかった。

「魔法だけで、焚き火をな」

組みあげた焚き火を調整しながら、カリユはさっきの疑問をたずねてみた。ディーネはこたえた。

「できるぞ」

「できるの？」

「うむ。造作もない」

「じゃあ、どうして」

そうしないの？ 不思議に思って首をかしげるカリユに、褐色の魔法使いはいった。

「カリユ。ぬしは魔法の火がどうして燃えているかしっておるか？」

カリユは首をふる。視線をむけられたジニイもおなじ動作をした。ディーネが手もちあげた。なにかをうけとめるようにひろげて、

「いま、わしの手のひらのうえになにがある」

「……なんにも」

雨もふってないし、落ち葉があるわけでもない。

「そうじゃな。しかし、ここにはマテルがある」

「マテル……？」

「そう。マテルはどこにでもある。火にも水にも、空気にも、土にも。わたたちのなかにもある。魔法使いは、そのマテルで魔法をつかう」

ディーネが人差し指をもちあげた。そこに音もなく火が生まれる。

「いま、この火はマテルを燃やしておる。マテルは万変の素子。燃え、凍り、吹き、いかようにでも姿をかえる。魔法の火は、普通の火とは異なる。カリユ、ぬしが先日、手でにぎりしめても火がきえ

なかったのもそのためよ」

カリユは自分の手をみた。そこにはもう火傷のあとはのこっていない。

「この火が燃え続けるということは、マテルを使い続けるということじゃ。いったいどこからそのマテルが使われておると思う」

「ディーネさんの、なか？」

視線でとわれたジニイが、自信なさそうにこたえた。

「それが普通じゃな。しかし、身体の中かのマテルには限りがある。疲れてしまう。もう一つ、やりかたがある。この大気中のマテルを使う。そうすれば大気の全てからマテルがなくなる限り、火は燃え続ける」

「疲れない、んですか？」

「疲れん。わしのなかから使うマテルは最初だけじゃ。そういう式を組んでしまえばいい」

カリユとジニイは顔を見あわせた。

いだいている疑問はおなじだった。 どうして、そうしないんだろう。

二人を等分にみて、ディーネはほえんだ。

「マテルは膨大じゃ。この世界すべてがマテルでできているといい。しかし、だからといって決して無限ではない。わしがそのあたりに燃え続ける火をつくったところで気にもとめんかもしれんが、そんなことはせん。できるといふことと、するといふことは別じゃ」

「便利なのにな？」

「便利の果てにあるのは死よ。それをもとめ、あがくところに生がある」

カリユは顔をしかめた。難しい言葉はよくわからない。

「たとえばな。わしがそれで火をつくっておったら、さっきのぬし

たちの会話はなかったらうよ」

ジニーがびくつと身体をふるわせた。

「聞いてたんですかつ」

「聞いておらんから安心せい。まあ、いまの反応でどんな会話だったかわかるがの？」

大声をだすジニーに、にやりとディーネが笑う。ジニーは真っ赤になった顔をおおった。

「なんでもできるからといって、それをやったところで虚しいだけじゃ。友も会話もなく、ただ己だけの存在で、いったい誰がわしの存在を認めてくれる」

魔法使いがカリユをみた。

笑顔のまま、そのまなざしがなにかいいかげだった。

カリユはナオミをおもいだしていた。

ディーネは彼女のことをいっているのだと、なんとなくそう思った。

たびだち 5

焚き火で温めた干し肉をかじって夕食をすませ、焚き火を囲んで少し話をしたあとは、その日は休むことになった。

見張りの番をつくらずに全員で休むという申し出に、カリユが驚いてたずねた。

「モンスターとか、危ないんじゃない？」

三人とも寝てしまったら、火の番もできない。

平然とディーネはこたえた。

「心配いらん。この辺には魔物除けを張っておく」

「それって、マテルの 無駄遣いにはならないんですか？」
ジニイがたずねる。

「使い手次第じゃな。マテルを如何に効率よく消費するかは、式による。わしならまあ、一晚で火の玉一発程度かのう。ようは力の掛け具合じゃ」

「シキ、をちゃんとすれば。強い魔法が使えるようになりますか」
ジニイは世間話とはおもえないくらい真剣な表情だった。

「魔法を修めたいのか」

カリユはジニイを見た。目をそらしたジニイが焚き火の炎を見つめてうなずく。それにカリユが口をひらきかけたところに、ディーネがいった。

「無理じゃな」

「……練習しても、ですか？」

「ぬし、はじめて魔法が使えるようになったときになにか練習したか？ しとらんだろ。ぬしらにとっての魔法はそういうもの。使えるか使えないかに過ぎん」

「そっじゃない人もいるの？」

カリユが口をはさんだ。ジニイが魔法をおぼえるのはともかく、ついてくるのは反対だったが、なんとなく気になる言い方だった。「そういう輩もある」

こたえながら口元にうかべた表情が意味ありげで、カリユはさらに質問しようとしたが、それをかわすように魔法使いがいった。

「さて、そろそろ寝る支度にかかれ。子どもは早く寝んといかん」立ち上がり、歩き出す途中でぼんぼんとジニイの頭をなでいく。「そうがっかりするな。本当にぬしにとって必要なときには、自然と使えるようになる。そういうもんじゃ」

焚き火のまわりの地面になにかをかきはじめたディーネから目をはなし、カリユは布袋からうすつぺらい毛布をとりだす。

ジニイをみると、まだしょんぼりしていた。

なんだよ、とカリユはおもう。魔法なんて使えるだけいいじゃないか。

声をかけるかわり、カリユは近くにあった水桶にわざと毛布を落として、すっとんきょうな声をあげた。

「あー！」

びつくりしたジニイが顔をあげる。

「ジニイ。魔法でこれ、乾かしてよ」

ジニイが眉をひそめた。

「……焚き火つかえばいいのに」

「いいから」

カリユはぶつきらぼくに毛布をおしつけた。

「やってよ。ふあいあーでさ」

カリユを見上げたジニイが、少ししてからくすりと笑った。

「しょうがないなあ」

毛布をうけとり、毛布の水に濡れた部分に手をかざす。ふぁいあ、とささやいた手のひらに火の玉が生まれて、弱々しい炎がゆらゆらとゆれる。

「……焦がさないでよ。絶対だからね」

「わかつてるわよ、もう。集中するから邪魔しないでっ」

怒りながら嬉しそうな幼なじみの様子にため息をついて、カリユは少しはなれたディーネの様子をうかがった。魔法使いはしらんぷりをしてきている。

なんでぼくがなぐさめないといけないんだろっ。理不尽におもって、カリユは手元の石を小さく蹴りつけた。

結局、寝るまでの短い時間のあいだにカリユの毛布はかわききらなかつた。

カリユは水にぬれた毛布に我慢してくるまり、寝ることになる。それでも、焚き火でかわかすのも、ディーネに乾かしてもらったとも少年はたのまなかつた。

火の元を追加してくべなかつた焚き火がゆつくりと灯りをよわめていく。

徐々に暗闇がつよまっていく視界で、カリユは目をとじずにじっとしていた。

大木の屋根にはばまれて、空に星はみえない。森のなかはまっくらやみになりかけていた。

ときどき、獣の雄たけびが聞こえる。モンスターの叫びかもしれない。

森で眠ることはこわい。家のように壁があるわけじゃない。柵と掘りにまもられた村のなかではないから、いつモンスターにおそわれるかわからない。

ディーネは結界をはるといつていたけれど、そんなものが本当に効果があるのだろうか。すごい魔法使いだと知ってはいるが、不安はあった。

不安と緊張がカリユから眠気をうばっている。それを好都合だとカリユはおもっていた。少年はこのまま眠るつもりなどなかった。彼はチャンスをまっていた。

近くでは幼なじみの寝息が聞こえる。添い寝するようにカリユと毛布を並べたジニイもしばらく寝つけないようだったが、ようやく眠ったらしい。

「……ジニイ、寝た？」

返事はない。

もう一度、相手の眠っているのを確認してから、カリユは幼なじみから身体をはなした。

物音をたてないよう、慎重に身をずらしていく。背中が小石のとながっている部分をふんづけてしまい、悲鳴がでそうになった。

あわてて口を閉じて声をこらし、上半身をおこす。

焚き火はすっかり鎮火してしまい、くすぶった火後がわずかに赤かった。

あたりはほとんどまっくらでなにも見えない。焚き火の向こう側に眠っているはずのもう一人の寝息はなかった。

毛布にくるまったままたちあがりかけて、カリユは自分の毛布の一部がジニイの身体に巻き込まれているのに気づいた。顔をしかめて毛布を手放す。ジニイの身体にそっとかぶせた。

闇になれても、ほとんどあたりは見えないほど暗闇が濃い。

カリユは手探りで目の前の地面の起伏をたしかめながら、すすんだ。

唯一、目印になってくれている焚き火のまわりを四つんばいに這

う。そろそろのはずだけど、と思ったところで手がなにか柔らかいものにぶつかった。

あわててひっこめる。

呼吸をとめ、相手の様子をうかがった。反応はない。眠っているのかもしれない。

そう思った瞬間、目の前の影が動いた。

「膝枕だけでは満足でんかったんか？」

からかうような声。カリユはあわてて相手の口をふさいだ。

遠くのジニイの寝息を確認する。

しばらく待っても、幼なじみに起きた気配はなかった。

「もうっ。静かにしてよ、ディーネ」

「女の寝込みを襲っておいて、その言い草かよ」

カリユの手からのがれ、楽しそうにディーネがいった。一応、声をひそめてくれている。

「……聞きたいことがあるんだ」

「ほう」

いいながら、ディーネはなにもかもわかったような気配だった。まるで驚いていない。

そりゃそうだ。だって心だって読めるんだから、なにを企んでてもばれねえだろうさ。相手に読まれていることを承知でカリユは毒づき、続けた。

「ジニイがいるから昼間は聞けないし。ナオミのこととか、それにうわっ」

カリユの言葉は途中で切れた。腕をつかんだディーネに、毛布のなかにひきずりこまれる。

「な、なにをう」

「内緒話なんじゃろ。それに、こうでもせんとぬしゃ風邪をひくぞ」
ディーネがいった。

カリユはあばれたが、あまりの温かさとそれからやけに柔らかな感触に、すぐに抵抗をやめてしまう。たしかに毛布なしで森の夜はさむかった。

いい匂いにする。眠気をさそう心地に、あわててカリユは首をふって意識を覚醒させた。

「ぬし、冷えとるぞ。ほら、ちゃんとくつつけい」

ときどきする。鼓動をおさえつけて、カリユは平静をとりつくろった。

「……話が見たいんだけど」

「なんじゃ」

息がかかるほど近くでは、やけに話しづらい。目の前に相手の胸があった。ディーネの息が頭にかかってこそばゆい。

こんなんじゃ無理だ！ カリユは身じろぎして無理やり相手に背をむけた。

「女に背を向けるとは、つれないわっぱじゃな」

あきらかにからかつている相手の言葉は無視して、カリユはたずねた。

「どうして、ジニイを連れてきたの」

「どうしてもなにも、止めたいならぬしが止めろといったぞ」

「そうじゃなくて　　ぼくには、村を出るのはすごい覚悟がいるとかいってたのに」

「そりやな。ぬし、村を出るのははじめてじゃろ」

カリユはうなずいた。

「あの者は違う。父親のおつきで行ったことがある。もともと、隣町までが行動範囲になっておるからの。ぬしとは違う」

まただ。

相手の言葉に言いようもない違和感をおぼえて、カリユは口の中ですづばやいた。コードウハナイ。行動はんい？

「村から出たことがあるから、連れてきたの」

「連れてきたのはわしではない。ぬしよ。まあ、間接的に関わっているのは確かかの」

細かい言い回しの意味はわからない。気にせず、カリユはつづけた。

「村をでたとき、すごく嫌な感じがしたのは、そのせい？」

「少し違う」

カリユの頭にあごを乗せたディーネが低めた声音でつげる。

「ぬしはあの村をでることがなかったのではない。これから先も村をでるはずはなかった」

カリユは眉をひそめた。

「これからもって」

「のう、カリユよ。ぬしが空を飛べないのは何故か」

突然、会話がかわったことに戸惑いながらこたえる。

「だって、ぼくには翼なんてないし」

「なら、翼がないのは何故か」

「……そんなの、そう生まれてきたんだからしょうがないよ」

「そういうことじゃ」

ディーネがいった。

「そういう風に生まれてきた。故にぬしは魔法を使えんし、空も飛べん。それと同じ理由で、ぬしは生まれた村の外に出ることはなかった。これまでも、これからもな」

ふと、カリユはこのあいだの夜のことを思い出していた。急にはじきとばされて、いくら頑張っても小屋に近づけなくなったあの現象を、ナオミは魔法じゃないといった。

いくら頑張ったって空を飛べない、絶対的な決め事。

「それが、セツテイ？ そんなの、ぼくのこれからがそんなのに、

決められるって……」

信じられない。

「それも違う。設定とは未来を決定づけるのではない。あくまで設定にそって、ぬしは行動するだけよ。その後に生まれる結果が未来と呼ばれる」

「でも。だって、ぼくはこうして村の外に出てきて」

ぞっとした心地でカリユは気づいた。

今まで、確かに村から外にできることなんて考えたこともなかった。カリユがそう思ったのは、ドラゴンとナオミのことがあったから。ディーネと出会ったからだ。

生まれついて空を飛べないセツティ。村を出ないのがそれなら、自分がそれをできたのはなぜだ。セツティというのが絶対的なものではないのか、それとも。

「あなたは、なに？」

相手を振り返らないまま、カリユはいった。全身が強張っている。今、自分を後ろから抱く相手の得体の知れなさにはじめて気づいていた。

すごい魔法使いだという、それだけじゃない。この女の人はずっと、ナオミとおんなじなんだ。

少年を抱く魔法使いがくすりと笑った。

「わしはわしじゃ。見えているとおり。触れているとおり」

ごまかしだ、とかさねて聞く勇気がない。いまや身体を動かすことさえカリユは躊躇していた。そんなことをすれば、相手に噛みつかれて、そのまま一呑みに食べられてしまうような恐怖を感じていた。

「カリユよ、ぬしはこれから多くのことを知る。知らんといかん」
少年の内心に気づいていないふうに、ディーネがささやいた。

「ゆっくりでいい。いずれ急かなければならんだから、今だけは

ゆっくりでな。もう休め。ぬしの世界は今日、途方もなく広がった。ただの歩き疲れでなく、頭が疲労しきっているはずじゃ。だから休め。いずれぬしの知りたいことはわかる。嫌でもそうなる」

そんなことをいわれても、カリユの頭はさえきっていた。

不安と、確信と、恐怖がぐるぐるに全身をしばってまるで眠気がやってくる気配がない。一晩中だって眠れそうになかった。聞いたこともまだまだある。けれど、聞いてしまうこともおそろしかった。

少年の気分をほぐすようにディーネが子守唄をうたいはじめる。聞いたことのある歌だった。

世界をつくった五匹の竜のお話。

それを聞きながら、嫌でもカリユは思い出してしまう。

森で見つけた小さなドラゴンと、その傷。ナオミのこと。

身体中を緊張させたまま、自分の首にゆるく巻きつくディーネの腕を見下ろす。

もしこの腕に噛みついたら、そこから流れる血はもしかして青いのではないか。

そんな試せるはずのないことをカリユは考えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8653x/>

君はNPC？

2011年11月27日20時57分発行